

ムーンリバー

関根信一

時間

1979年9月末から10月末までの約一ヶ月。

登場人物

- 高橋大地 中学二年生。
高橋富美子 大地の母。
高橋久雄 大地の父。下町の小さなネジ工場、高橋製作所の社長。
高橋夏子 大地の妹。中学一年生。
秋本美土里 大地の同級生、クラスメイト。家も隣りどうし。
秋本アサ子 美土里の母。
岡崎四郎 町内の桜井電器店の店員。
内藤和人 高橋製作所にやってくる住み込みの工員。
星野珠代 中川中学校、2年4組の担任の教師。国語担当。
石坂雄三 中川中学校、2年4組の副担任。理科担当。
大貫晴美 中川中学の養護教諭。
星野栄一 珠代の父。九州の大衆演劇の一座にいた元旅役者。
長谷川聡 中川中学2年4組。大地の親友。
望月伸也 中川中学2年4組。いじめっ子。クラスの主のような存在。
北村泰司 中川中学2年4組。
西澤澄江 中川中学2年4組。クラス委員。
飯岡真由美 中川中学2年4組。

場面

高橋大地の家の茶の間（含む玄関先）、大地の部屋、物干場と中川中学校の教室と保健室、近くを流れる荒川放水路の河川敷。

下町では坂を上るとそこは橋で、その下を川が流れている。

水害を防ぐために新たに掘られた放水路の河川敷は、そこに立つと、それまでそこにあつた何かがなくなつたあのようなからんとした何もなさを感じさせる。

この時代、下町の家々の間に流れていたどぶ川もまもなく暗渠になり、排水場の設備も整い、このあたりが零メートル地帯だということも忘れられてしまう。

この物語は、忘れられてしまった思い出。見えなくなってしまうた川が、まだ現実のものとして存在していた頃のお話。

舞台の中空には、大きな月が輝いている。

月の光は川面を照らし、家々の茶の間にも射し込む。

今は小指の爪の先ほどにしか見えない月だが、この舞台では、子供の頃描いた絵の中の大きさのまま、人々を照らしている。

*

*

*

1場 保健室

東京の下町の中川中学校、その保健室が舞台にある。

シンプルなイスが2つ。白い布のかかったついたてが2つある。その向うにベッドがあるのだが、客席からは見えない。

水曜日の午後。5時間目の始まる時間。チャイムが鳴る。

養護教諭の大貫晴美がやってくる。ついたての奥に声をかける。

大貫

どう気分は？

ついたての奥は無言。

大貫

五時間目は、いいから、ここで寝てなさい。石坂先生には話してきたから。

ついたての奥は無言。

大貫

給食、途中だったんじゃない？ 持ってこようか？

まだ無言。

大貫

ねえ、何があったの？

やっぱり無言。

大貫 ま、いいわ。話したくなったらで。でもね、自分の中にためこんでおくとどんどん
つらくなるわよ。私でよかったら、何でも聞くからね。

廊下から、望月伸也がとびこんでくる。手にはぬんちゃく。学年一の暴れん坊
。

伸也 高橋、いるんだろ？

大貫 何よ、望月くん、もう五時間目始まつてるじゃない。

伸也 戻ってこないから、見に来たんだよ。ここじゃないかと思って。あいつ寝てんの？

大貫 いいから、教室に戻りなさい。

伸也 俺も寝てこうかな？

大貫 元気な人は、授業を受けるのよ。

伸也 俺だって、気分悪いよ。いいじゃん。

大貫 授業受けたくないからでしょ。さ、早く行きなさい。

伸也 ちえっ、いつも高橋ばかりひいきして。なんだよ。いるんだろ。おい！

大貫 やめなさい、こちら。

伸也、大貫をふりきって、ついたてを動かすと、そこにいたのは、高橋大地で
はなく、国語教師の星野珠代。

大貫 やだ、星野先生。

伸也 なんだ、珠代かよ。何してんだよ？

星野 ちよつと、気分が悪くて、休んできたの。

大貫 あなた、授業は？

星野 五時間目はなし。

大貫 高橋くんは？

星野 え？ 知らないよ？

大貫 やだ、どこ行ったのかしら？

星野 教室じゃない？ たぶん。

伸也 なんだ、いねえのかよ。つまんねえな。

大貫 ほら、あんたも教室に戻る。

星野 そうよ、戻りなさい。

伸也 珠代は？

星野 私は教師、あなたは生徒でしょ。授業さぼりたいんなら、早く大人になりなさい。

大貫 やだ、やっぱりさぼってんの？

星野 休憩よ。ちよつとだけ。ほら、早く行く。

伸也　ちえつ、早く大人になりてえよ。

伸也、出て行きかけると、化学の教師、石坂雄三が入ってくるのにぶつかる。

石坂　なんだ、望月、こんなとこで何してる？　早く教室行け！

伸也　はい、はい。

伸也、出ていく。

石坂　まったく、どいつもこいつも保健室に入り浸りで、一体なんだと思ってるんだ。

星野　すみません。

大貫　避難場所みたいなもんじゃ不是吗？　休み時間、教室にいるのがつらい子は、どこかに居場所を見つけるもんです。図書室、校庭、体育館。一人でじっとがまんするくらいなら、ここに来てもらった方が、まだ何かたすけてあげられるかもしれないですし……

星野　ありがとね。

大貫　生徒の話よ。

石坂　高橋は？

大貫　それが、教室に戻ったみたいで……

石坂　じゃあ、行き違いかな？　全く、あいつにも困ったもんだ。

大貫　望月くん？

石坂　いや、高橋ですよ。成績はいいのに、どうしてああ、覇気がないのか。だから、いじめられてもそのまんま何もできない。

大貫　たしかにね、このところ、毎日のように、ここで休んでますもんね。カラダの具合っていうよりも、きつと教室にいるのがつらいんですよ。

石坂　それが甘えだって言ってるんですよ。やられたら、やりかえす。そうしないかぎり、いつまで経ってもあいつはいじめられっ子のままですよ。

星野　あの、その言い方じゃ、まるで悪いのは、高橋くんみたいじゃありません？　それって……

石坂　そういうつもりじゃ。ただ、私たちが子供の頃だって、あの望月みたいな乱暴なやつはいっぱいいたもんですよ。でも、それなりに仲良くやってた。そういう子とつきあつてく上で、おとなしい子も成長していくんですよ。ねえ、大貫先生。

大貫　ごめんなさい。私、石坂先生とは世代が違うんでちよつと……

星野　私も。

石坂　目には目をですよ。やられたらやりかえす。これが、大人のルールですからね。きれいな事じゃ、校内暴力はなくなりません。

星野　そうかしら？

石坂　そうですよ。トイレのドアがぼろぼろになってるのも、掃除用具がぼろぼろなのも、みんな、誰がやったのかをはっきりさせないで、対応が後手後手になってるからですよ。まったく。

大貫　たしかに高橋くんももう少しなんていうか、しつかりすればいいのに。もう少し男らしくっていうかね。他の子たちがどんどん男くさくなってくのに、なんだか一人取り残されてるかんじで。

石坂　そうなんですよ。だから、いじめられる。そこをなんとかしないと。じゃあ、私は授業に行きますけど、星野先生、帰りのホームルームには戻ってきてくださいね。いつもいつも副担任の私に任されてると、クラスでのあなたの立場も微妙になってくる。

星野　わかってます。

石坂　いいですか？　がつんとやるんですよ。そう、がつんとね。お、いいな。がつん。そうだ、高橋にも言っちゃろう。がつんだ、がつん。

石坂、独り言を言いながら、出ていく。
大貫と星野、顔を見合わせる。

大貫　どう思う？

星野　がつんとやった結果がこうだってことが、わかってないのよね、あの人には。

大貫　そうよね。高橋くん、どうするかしら？　あんなこと言われたら？

星野　さあ。（奥に向かって）どうする？

大貫　？

ついたての蔭から高橋大地が顔を出す。

大貫　やだ、いたの？

星野　ごめんね、かくまってたつもりが、いやなこと聞かせちゃって。

大地　別に。

間

大貫　五時間目は休んでくんではよ、星野先生も？　そうだ、職員室でコーヒー入れてくるから、ゆっくりしましょ。飲むでしょ、コーヒー？　ね。じゃあ。

大貫、出ていく。

星野　ごめんね、情けない担任で。

高橋 そんな、あやまられても……

星野 私もたまらないのよ、給食の時間。パンは食べるものでしょ？　それが、頭の上を飛び交ってるんだもん。私、給食の時間が一番嫌いよ。子供の頃は、嫌いなきゅうりをいつまでも残って食べさせられてイヤでイヤでしようがなかった。給食なんて大嫌い。こんな苦しみ大人になったらサヨナラだわって思ってたんだけど。

高橋 キュウリ苦手なの？

星野 そうよ。職員室で食べるときには、こっそり戻すんだけど、教室だと、何言われるかわからないからね。教師はお手本にならなきゃいけないって誰が決めたの？　いいじゃないね、弱いところも何もかも見せてこそ、本当の教師だと思わない？

高橋 僕はもう少ししっかりしてほしいと思います。

星野 はい。で、今日は何があったの？

高橋 別に何も。ちよっとお腹の具合が悪くなっただけだし。

星野 そう。って、深くは聞かないのが、大人のつきあいだけど、一応、私は担任だし、あなたは生徒なんだし、もう少し話してくれてもいいんじゃない？

高橋 話すことなんてないよ。

星野 わかった。じゃあ、私、行くわ。ゆっくり休んで。

高橋 何、急に。

星野 私、高橋さんに迷惑かけてるよね。教室で、何されてもじっと我慢してるあなた見ると、なんだかガンジীর無抵抗主義ってこういうもんだったんだなあって気がしてくるの。なんだか励まされるんだわ。よし、じゃあ、職員室に行こう。逃げてちゃだめだわ。

高橋 コーヒーは？

星野 いいわよ、私と大貫先生と二人とお茶しながらあれこれ聞かれるのやでしょ。取り調べみたいで。私はパスするから。じゃあね。

星野、出ていく。

一人残った、大地、考え込んでいる。

2場 高橋家の茶の間

東京の下町の高橋家の玄関先から茶の間が舞台の上にある。

入口は、今風のドアではなく、ガラガラと開ける引き戸。古い日本家屋風の玄関は、2畳ほどの土間。石の靴脱ぎと板の間の上がりかまち。上がった右手がトイレ。その向うが風呂場。廊下の向うが6畳の茶の間。

この家は、昭和20年代に建てられたものに手を加えてきた二階家。階下は、6畳の茶の間と8畳の仏間。茶の間に通じる3畳ほどの空間が台所。台所の奥の勝手口から、離れになっている工場に行けるようになっていた。15年ほど前に増築した2階は、四畳半が二間。この家に、久雄、富美子、大地、夏子の四人が暮らしている。

9月の末のある日。夕方6時を回った頃。

下町の工場のにぎやかな音が聞こえているが、やがて静かになる。あちこちの工場で仕事が終わる時間。豆腐屋のラッパが遠くから聞こえる。

夕焼けが消えかかる頃合い。中空にぼんやりと月がかかっている。

誰もいない舞台。

車の止まる音。

桜井電器店の岡崎四郎がやってくる。仕事の途中らしい。

四郎

ごめんください、桜井電器です。……………こんばんは。あの……………？

返事はない。

四郎、あがりかまちにこしかけて、部屋の奥をのぞく。

四郎

(少し大きな声で)ごめんください！ごめんください。

夏子が帰ってくる。

夏子

ただいま。あれ、岡ちゃん、どうしたの？

四郎

ああ、なっちゃん、おかえり。不用心だよ。玄関開けっ放し。誰もいないのに。

夏子

あれ、お母さんは？

四郎

いないみたいだよ。

夏子

買い物かな？

四郎

僕に聞かれても……

夏子

工場じゃないかな？何か用、お母さんに？

四郎

うん。ちよつと。

夏子

ちよつと何？

四郎

だから、テレビ。

夏子

(大声で)テレビ！？ついに買ったんだ。何、もう来てる？

四郎

まだ。ちよつと話してこれから持ってこようかと思うんだけど。

夏子

そんな、早く持ってきてくれればいいのに。

四郎 だって、旦那さんには内緒だって。反対してるんでしょ？

夏子 うん。でも、こつそり新しいのに取り替えちゃおうってことになって。どうせ、仕事のあと、一杯飲みに行って、帰ってくるころには酔っぱらってるんだもん。気がつくわけない。

四郎 そうなの？

夏子 そうそう。（呼ぶ）お母さん！ ちょっと待ってて、呼んでくるから。

夏子、家に上がり、奥に行く。階上から大地が降りてくるのとぶつかる。

夏子 ねえ、お母さん、上にいる。

大地 工場じゃないの？

夏子 あ、そう。ねえねえ、来たよ、テレビ。

大地 うそ。

夏子 ほんとだって。お母さん！ テレビ、テレビ。

夏子、奥に消える。大地、玄関先に出てくる。

四郎 早引けたんだって、学校？

大地 何で知ってるの？

四郎 あ、さっき、お母さんと話した、電話で。

大地 給食食べたら、お腹いたくなっちゃって。保健室で寝てただけど。

四郎 風邪かな。今の風邪、腹にくるって言うから。

大地 そうかも。

四郎 髪、ずいぶん、さっぱりしたね。かっこいい。

大地 いいよ。みんな、切れ切れてうるさいから、切ったんだけど……尼さんって言われた。

四郎 ニさんは、もっとつるつるなんじゃないの？ 良く知らないけど。

大地 この毛先がさ、もっとつんつんするかと思っただけど、だめなんだよ。なんだか寝ちゃって。

四郎 髪の毛やらかいんだよ、しょうがない。何かつけたら、チックとか？

大地 いいよ、いやなんだ、あの匂い。それに校則違反だから、整髪料は。

四郎 わかりやしないうって、貸してあげるよ。

奥から夏子と富美子がやってくる。富美子は、工場での仕事を終えたところ。

富美子 ごめんね。気がつかなくて。

大地 お父さんは？

富美子 もう出かけた。品物の数がどうしても合わなくて。なのに、ほったらかしで出かけちゃうんだから。そんなに酒が好きかね？ もう、全然、聞こえなかった。岡崎さん、声小さいから。

夏子 チャイムつけようよ。ピンポンっていう。

富美子 こんな小さなうちでおかしくない？

夏子 ふつうだって。美土里ちゃんちだってこないだつけたよ。

富美子 となりはとなり、うちはうち。それにね、一日中、大きな音さして仕事してるんだから、あんなもんちよつと鳴ったって気がつきやしないんだから。

四郎 うちの持ってこようか？

富美子 そんな、いいわよ。

四郎 こないだこしらえたのがあるから。簡単なやつなだけど。

夏子 ただ？

四郎 う、うん。

富美子 夏子、何言ってるの。

四郎 今度持ってくるから。で、今日は……

富美子 あ、そうそう、テレビ、テレビ。持ってきてくれた？

四郎 いや、まだ。

富美子 いやだ、早くしてよ。お父さん帰ってこないうちに。

四郎 いいんですか、ほんとに？

富美子 さつき電話で話したじゃない。

四郎 でも……

富美子 社長？

四郎 ええ……

富美子 もう、桜井さん、お父さんと同級生だからね。

四郎 気使ってるんですよ。

富美子 だいじょうぶだって言っついて。だから、早く。

四郎 ほんとにいいんですね？

富美子 いいから。

四郎 じゃあ。

四郎、玄関を出ていく。

夏子 21型？

富美子 そうよ、思い切ってるね。

夏子 やった！ お父さん、帰ってこないよね？

富美子 平気、平気。ビール1本に枝豆と煮込みで、いつも30分はかかる計算だから。

夏子 よし！

大地 いいの、内緒でテレビなんて買っちゃって。

夏子 だって、壊れたんだから。

大地 直せば使えるって言ってたじゃん。

夏子 大きいのに買い換えるかなって言ってたよね、お父さん。

大地 でも、今はがまんしようって。

富美子

昼間ね、聞いてみたのよ、電話して。修理したらいくらになるか。あんまり違わないだもん。だから、いいの。

と、玄関の向うから声。

美土里（声） ごめんください。

夏子 あれ、美土里ちゃん？

返事を待たずに入ってくる美土里。セーラー服を着ている。中学二年生。となりに住んでいる大地のおさなじみ。今は、クラメイト。同じクラスの長谷川聡がいる。肩掛けカバンをかけている。

大地 何だよ、聡まで。

美土里 どうなの具合は？

大地 だいじよぶ。

美土里 これ5、6時間目のノート。

大地 いいよ。

美土里 宿題出たから。あとで取りに来るから、うつしときなよ。

大地 ありがとう。

富美子 もう、お腹の調子が悪いから早退って、そんなの少し我慢すれば、すぐに帰ってこれるのに。これで何回目？

大地 いいじゃん。

富美子 ほんとに具合悪いの？ 学校がやなだけじゃないの？

大地 違うって。

富美子 ま、いいわ。夏子、あんた、買い物行ってきて。

夏子 ええ、今、帰ってきたばかりだよ。

富美子 じゃあ、お米といでくれる。

夏子 何、今からなの？

富美子 忙しかったんだから、しょうがないでしょ。藤木精肉店でコロッケとハムカツ買ってきて。

夏子 また、揚げ物？ 太る。

富美子 じゃあ、その分、走って行つといで。

夏子 もう……着替えてくる。

夏子、退場。

富美子 (美土里に) あんたもよかったらうちで食べてく？ お母さんまだなんでしょ？

美土里 あ、いいです。うちは適当にするんで。

富美子 あら、そう？ 長谷川くんは？

聡 僕もいいです。

富美子 そう？ (大地に) じゃ、テレビ来たら、呼んでね。

富美子、退場。

美土里 (長谷川に) 来な。

聡 ……。

聡、かけていたカバンを大地に渡す。

美土里 私が持ってくると、何だか話が大きくなりそうだったんで、長谷川に来てもらった。

大地 別にいいのに。

美土里 私もそう言ったんだけど、珠代が持って行って。

聡 うん。

美土里 早引けってことになってんの？

大地 うん。珠代が電話してきたって。みんな探してた？

美土里 そうでもない。保健室に、「早退します」って書き置きがあったから。大貫は、子供が寝てるのになどここにいたんだって絞られてるみたいだけど。でも、中学二年生としては、勝手に帰ってくるのはまずいんじゃない？

大地 みんなまだ授業中だから、誰にも会わないですむし。

美土里 やっぱりそれか？

大地 え？

美土里 私は、思ってないよ。尼さんだなんて。

聡 僕も。

大地　　いって。

美土里　長谷川が黒板に似顔絵書いたのは、望月にやれって言われたからだって。

大地　　そんなに似てたかな？

美土里　うん。あ、でも、いくらそっくりだからって、そのままにした石坂はひどいよね。

大地　　いいよ、あんなやつ。

聡　　ちゃんと消しといたからさ。元気だしなよ。

大地　　元気だって。

聡　　なら、いいけど……じゃあ。

聡、出ていく。

美土里　あいつも反省してんだよ。親友としてしちやいけないことしたって。

大地　　そんな大したことじゃないって。

美土里　何言ってるの、それが理由で保健室に行ったくせに。でもさ、あんな絵、笑って知らん顔できるくらいじゃなきゃだめなんじゃないの？　あれはさ、いやがらせとかじゃなくて、何ていうの？　表現なんだからさ？

大地　　表現なら何してもいいのか？

美土里　だって、そっくりだったじゃん。

大地　　だから、笑ったんだ、一緒になって？

美土里　え？

大地　　僕がショックだったのは、いつもは望月のこと、なんだかん言ってる女子までが、あいつが無理矢理書かせた絵を見て、一緒になって笑ってたってことなんだよ。ようやく思い切って髪切ったのに。

美土里　しょうがないじゃないよ。だって、よく書けてたんだもん。

大地、ノートを美土里に差し出す。

美土里　何？

大地　　いいよ。

美土里　だって、明日までだよ。明日休む気？　だめだって、そんな。

大地　　そんなこと言わないじゃん。でも、いつもいつも、悪いからさ。

美土里　別にいいよ、気にしなくて。はい。（とノートを渡す）

大地　　だから、いって。

美土里　なんで？

大地　　だから……

美土里　迷惑ってこと？

大地 そういうわけじゃないけど……

美土里 けど？

大地 「なんだ、またかよ」って言われるのがめんどくさい。

美土里 気にすることないって。

大地 そうなんだけど。やっぱり……

美土里 あの子、そんなこといいいじ言ってるから、女みたいとか言われるんだよ。

大地 なんだよ？ 人のこと言えるかよ。

美土里 人のことって？

大地 自分だって、言われてんじゃん。男みたいだって。

美土里 だから、そんなのおかしいって、一緒に鬨おうって言ってんじゃん。

大地 そんなの余計、めんどくさくなるだけだって。

美土里 私たちが仲いいって噂になってるから？

大地 まあね。

美土里 しょうがないじゃん、仲いいんだから。古いつきあいなんだから。

大地 でもさ……

美土里 迷惑ってこと？

大地 そうじゃないって。

美土里 大地、女みたいって言われてるわけでしょ。だったら、私と噂になれば、なんていうか、いいんじゃないの？ 違うかな？

大地 だから、そうはなってないじゃん。女と仲いいって、なんだかんだ言われるだけだし。

美土里 それっておかしくない？ ねえ、なんでそうなるの？

大地 知らないよ。とにかく、これ（ノート）はもういいから。

美土里 ……………

と、玄関から声。

アサ子の声 こんにちは。奥さんいる？

美土里の母、秋本アサ子が入ってくる。

アサ子 （美土里に）やだ、あんた何してんの？

美土里 なんでもない。

アサ子 （大地に）お母さんは？

大地 夕飯の支度してる。（奥に）お母さん！ 秋本さん。

奥から、富美子が登場。

富美子 あら、おかえりなさい。今日は早いのね。

アサ子 出先からまつすぐ帰って来ちゃった。これ、もらいもんなんだけど、どうぞ。

アサ子、菓子折のようなものを渡す。

富美子 いつも悪いわね。

アサ子 いいのよ、うちは二人きりだから、食べきれないし。美土里も、太るからとか言っ
て、甘いもん食べないっていうし。

美土里 余計なこと言わなくていいよ。

夏子が降りてくる。

夏子 お母さんお金。

富美子 はい。

と財布を渡す。

夏子 行ってきました。

夏子、出ていく。

美土里 私も。(大地に) じゃあね。

大地 あ……

美土里、ノートを置いたまま帰ってしまう。

アサ子 何、あの子？

富美子 今日、大地、早引けしてきたんで、ノート持ってきてくれて。

アサ子 あら、そうなんだ。

大地 (アサ子に) じゃあ……

大地、二階に上がっていく。

アサ子 何、大ちゃん、またなの？

富美子 まあね。

アサ子 今週は二度目じゃない？

富美子 二期が始まって、しばらくはなんともなかったんだけどね。

アサ子 ああ、なんか、学校めちやくちやよね。どうしてあんなっちゃったんだろう。

富美子 さあね。

アサ子 教師がちゃんとしてないからじゃない。

富美子 星野先生？

アサ子 そうそう、こないだの父母会だって、やる気あるんだかないんだか。それに、何、あの格好。妙にちゃらちゃらしちゃって。大人が乱れてるから、子供もおかしくなるのよ。

富美子 そうなのかしらねえ。

アサ子 ねえ、登校拒否って知ってる？

富美子 え？

アサ子 学校行かなくなっちゃうのよ。

富美子 うちのは違うわよ。ちゃんで行ってる。時々、お腹痛いって、遅刻したり、早く帰ってくるけど。

アサ子 初めはそうなんだって。そうやって、ずるずる行けなくなっちゃうのよ。

富美子 だいじょぶよ。大地は。

アサ子 そう思ってるのは親だけだって話よ。

富美子 何よ、それ？

アサ子 ああ、なんでもない。何でもない。

富美子 ちよつと言いなさいよ。

そこへ、四郎が入ってくる。

アサ子 あら、岡崎さん、何？

富美子 ちよつと待っててね、今、片付けるから。

アサ子 どうしたの？

富美子 テレビよ、テレビ。21型。

アサ子 あらまあ。

岡崎 あのそれが……

富美子 ……

玄関から、久雄が入ってくる。仕事のあと、軽く飲みに出かけた帰り。といっても、まだ酔っていない。

富美子 お父さん。

久雄 ……………

岡崎 そこでばったり会ってしまつて……

富美子 お帰りなさい。ずいぶん早かつたね。

久雄 こつそりとりかえてもわからないつていうのは、どういうことだ？

富美子 やだ、なんで、そんなことまで言うかな？

四郎 聞かれたんで、つい……

富美子 (久雄に) 昼間ね、修理したらいくらになるか聞いてみたんだけど、あんまり変わらないの。だから、ま、いいかなつて。そうだ、びっくりさせようと思つたのよ。

久雄 そうだつて、なんだよ。

富美子 びっくりしたでしょ？

久雄 直して使おうつて話しただろ？ なんで勝手なことすんだよ。

富美子 内緒にしたのは悪かつた。でも、いいじゃない。もう、持つてきてくれちゃつたんだもんねえ？ 今さら、持つて帰つてもらうの悪いじゃない。

岡崎 それはいいんですけど。

富美子 よくない、よくない。いいから、持つてきて。

岡崎、久雄を見るが、久雄は無視。

このあたりで、二階から大地が降りてきている。

岡崎 (アサ子に) どうしましょう？

アサ子 ほらほら、岡崎さんも困つてるじゃない？ ねえ、ここはお互いに大人になつて、ちよつと折れてみてもいいんじゃないかしらね。

富美子 お互いに？ ちよつと待つて。折れるのはどつちなの？ 私、お父さん？

アサ子 さあ、どつちでもいいんじゃない？ こういう場合。

富美子 何よ、それ？

久雄 秋本さん、すみませんが、これはうちの問題なんで、ちよつとだまつてもらえますか？

アサ子 あら、そうだつたわね。じゃ。おじやましました。

アサ子、富美子に目で「負けるな」と挨拶して出ていく。

富美子 あんな言い方ないと思うよ。

大地 そうだよ。テレビくらいで大人げないよ。

久雄 なんだ、お前まで。

大地 いいじゃん、どうせ、そのうち買い換えるんだから。

久雄 なんだ、またお前は、母さんの味方するのか？

大地 もう、何言ってるの？ そんなんじゃないって。

久雄 今日はどうしたんだ？ また早引けか？

大地 お父さん、今はテレビの話。

久雄 こつそり帰ってきてても、ちゃんとわかってるんだ。なんで隠すんだ。ほんとに具合が悪くて帰ってきたなら、なんでこそこそする？

大地 テレビの話じゃないの？

久雄 テレビの話だ。

大地 ええ？

久雄 テレビのことも、学校のこと、みんな母さんとお前たちで勝手に決めて、俺はいつも蚊帳の外じゃないか。俺はそういうことを言ってるんだ。

富美子 蚊帳の外って、そんな、ちゃんと話してるじゃない。

大地 もう、めんどくさいな。今、話したから、それでいいじゃない。

久雄 そういうことじゃない。

大地 じゃあ、どういうことよ。お父さんだって、テレビほしいんでしょ、ほんとうはプロレス、見れなくて、昨日、つまんながってたじゃない。ほんとと大人げないんだから。

久雄 なんだと。

富美子 もうやめて。

久雄 いちいち理由つけて文句言ってる、いばりたいだけなんですよ？ もういいよ。わかったから。ほんとと素直じゃないんだから。

富美子 大地、お父さんに何言ってるの？

久雄 岡崎さん、悪いけど、テレビ持って帰ってくれるかな？

岡崎 はい、わかりました。

久雄 大地が学校早引けしなくなったら、そのとき、またお願いするんで。社長にもそう言っといて。

富美子 お父さん、大地とテレビは関係ないでしょ？

久雄 (大地に) いいな、大地？

大地 ……いいよ、ラジオ聞くから。

久雄 じゃ、そういうことで。

と玄関から声がする。

声 あの……

つづいて、男が登場する。男は、内藤和人。大きな荷物を持っている。背の高い、若い男。

内藤 すみません。あの……

久雄 ああ、悪かった、悪かった。ちょっと取り返したもんで。

富美子 誰なの？

久雄 今度、うちで働いてもらおう内藤さんだ。

富美子 え？ ちょっと何それ？

久雄 新倉さんに前から頼んでたら、いい人がいるって。（内藤に）ま、上がってよ。

富美子 ちょっと、お父さん、私、そんな話聞いてないよ。

久雄 さっき決まったんだよ、新倉さんに会って、決めてきたところなんだから。工業高

校卒業して、旋盤の機械にも慣れてるって。

富美子 テレビのこと、あれだけ文句つけといて、自分はそうやって勝手に話決めるんだ？

久雄 それはそれ、これはこれだ。

富美子 ちょっとお父さん？

内藤 あの、さっきお話した件なんですけど……

久雄 ああ、住み込みって話？（富美子）いいよな？

富美子 住み込みって、どこにですか？

久雄 工場の奥の物置、片付ければいいだろ。（内藤に）3畳間だけでいいかな？

内藤 はい、助かります。

久雄 よし、じゃあ、決まった。紹介しよう、うちのかみさんの富美子。これは長男の大

地、（富美子に）夏子はどうした？

富美子 買い物ですよ。

内藤 （岡崎を指して）こちらは？

岡崎 桜井電器店のもんです。

内藤 ああ、すみません。

久雄 ちょっと、工場見てもらおうか？ こっちだから。

久雄、奥の工場へ行く。

内藤 はい。（富美子たちに）よろしくお願いします。（大地に）よろしく。

大地 ……。

内藤も奥へ行く。

玄関から、アサ子が入ってくる。

アサ子 ちょっとちょっと、誰なの？ あの人の？

富美子 住み込みで働くんですって。

アサ子 お宅で？

富美子 そうみたい。

アサ子 やだ、ちよつといい男ねえ。(岡崎に) ねえ？

岡崎 ええ。

夏子が戻ってくる。

夏子 ただいま。

富美子 夏子、もう一度、買い物行ってきて。

夏子 え？

富美子 一人分追加よ。

夏子 何で？

3場 大地は走り始めた

大地の部屋。数日後の夜。

聡と大地がいる。

部屋のすみにはラジオ。

聡 それでテレビないんだ。

大地 うん。

聡 ちゃんと学校行って、テレビ買ってもらえばいいんじゃないの？

大地 そうなんだけど、それもなんだか悔しくってさ。テレビほしさに学校行くって、子供みたいじゃん。

聡 だから、学校行かないの？

大地 そういうこと。

聡 お父さんの計画、逆効果だったってわけだ。

大地 まあね。夕飯のとき、いつもはテレビ点けっぱなしだったけど、今はないじゃない。だから、静かに話ができるなんて言っちゃってさ。でも、別に話すことなんてないじゃない？ 結局、僕はだまって夕飯食べて、みんなは内藤さんと愉しくおしゃべり。

聡 大地は？

大地 別に話すことないもん。聡、また夕飯の時間に来てよ。誰か来ると、夕飯、部屋で食べてもいいってことになるから。卓袱台、狭すぎて。内藤さん一人増えただけで、もういっぱいだから。

聡 よかったね、行かない理由が見つかった。

大地 聡もやめれば学校行くの？

聡 うちは、大地のとこみたいにな、理解のある親じゃないから。

大地 理解っていうか、意地の張り合いみたいなものだけだね。望月、相変わらず？

聡 うん。少林寺習い始めたんだって。休み時間、なんにもしてないのに回し蹴りとか
跳び蹴りとかしかけてくるし。

大地 あのなんでもなさやが積み重なると、きついんだよね。

聡 うん。でも、平気だから。

大地 僕がいなくて、聡に集中してんじゃないの？

聡 まあね。でも、平気だよ。美土里もかばってくれてるし。

大地 美土里か……。

富美子 富美子がいってくる。手に、映画のパンフレット。

聡 あ、ごちそうさまでした。

富美子 おそまつさまでした。これありがとうございます。おもしろそう。見に行けばよかったな。

聡 青砥の京成名画座でまだやってますよ。

富美子 あ、そう。でも、無理無理、忙しくて。

大地 隣の駅なんでもん、行って来ればいいじゃない。

富美子 一緒に行く？

大地 僕はいい。

富美子 一人で行くのはいやなのよ。昔から。

大地 じゃあ、お父さんと行けば？

富美子 行かない、あの人は。

大地 夏子は？

富美子 クラブで忙しいからね。

聡 内藤さんは？

間

富美子 そうね。

大地 いいんじゃない？ 誘ってみたら？

富美子 でも、それって、どうなんだろう？ いいのかな？

大地 いいんじゃない？ いいって言えば。

富美子 お父さん？

大地 内藤さん。

富美子 言うかな？

大地 知らないよ。

富美子 ううん、だめ。あの人はうちで働いてる人。そんな一緒に出かけたりするの变だもの。(聡に) そうよねえ？

大地 友達としてならいいんじゃないですか？

富美子 友達じゃないのよ、雇い主と使用人なんだから。いいわ、行かない。これ見て犯人わかっちゃったし。このヒモで首閉めてる高峰三枝子が犯人なのよね、きつと。

聡 (プログラムを見て) うわ、ほんとだ。全然、気がつかなかった。

大地 だいなしじゃん。こんな写真載せちゃ。

聡 うん。

富美子 また、何か見たら、プログラム持ってきて、映画の話して。長谷川くん、普段おとなしいのに、映画の話になると別人だよね。

大地 うん。

富美子 最近見て、おもしろかったのは何？ 参考にするから。

聡 えーと、岩波ホールで見た「旅芸人の記録」かな。

富美子 へえ、どんな映画？

聡 ギリシヤの旅芸人の一座の話で、すっごい長いんだけど、すっごいよかった。時代がどんなに変わっていても、ギリシア悲劇を演じ続ける一座の話。

大地 「銀河鉄道999」は？ 一緒に行ったじゃん。

聡 あれも、それなりにおもしろかったけど、テレビの方がよかったかな？

富美子 あとは？

聡 「ああ、野麦峠」は大竹しのぶの死ぬところがよかったけど、原田美枝子がかつた。

富美子 「ああ、野麦峠」か。せつない話よね。仕事しすぎて死ぬのよね。

聡 そう。

富美子 私はいいわ。なんかこう、昔のオードリー・ヘップバーンの映画みたいなばーっと元気が出るのが好きよ、私は。

聡 あんまり流行りじゃないかも。

富美子 おかしいわよね。見たい人いっぱいいるはずなのに。元気がでる映画。なんでだろう？

聡 さあ？

富美子 やだ、またおしゃべりしちゃった。長谷川くん、もう遅いからそろそろ帰りなさいね。うちの、学校ないけど、あんたは明日早いんだから。

大地 そういう、学校行く気がまるつきりないって決めつけるいいかた良くないと思うよ。

富美子 じゃあ、行くの？

大地 ……

富美子 いいわよ。行きたくなったらで。星野先生もそう言ってくれてるし。そのうちで。

(長谷川に) じゃあ、ぼちぼちね。

聡 はい。

富美子、出ていった。

大地 毎日、あんなだもん。学校行く気なくなるだろ？

聡 お母さんの計画も逆効果ってわけか？

大地 え？

聡 なんでもない。

大地 テレビがないから、なんだかんだって、しゃべりに来るんだよ。

聡 いいことなんじゃないの？

大地 めんどくさいじゃん。僕はラジオ聞いているほうがいい。

聡 なるほどね。

間

聡 まだしゃべってつてもいい？

大地 いいよ。映画？

聡 うん。

大地 何？

聡 「スーパーマン」

大地 へえって、それってずいぶん前じゃないの？

聡 うん。

大地 それに、どんな映画かも聞いたよ。たしか。

聡 そうなんだけど。

大地 そんなにおもしろくもなかったって言ってたじゃん？

聡 うん。

大地 ま、いいや。「スーパーマン」がどうした？ また、クリストファー・リーブのもつこりの話？

聡 違う、いや、そうなのかな？

大地 何よ？

聡 あのとときは、話さなかったんだけど、見てたら、となりの人の手が、僕のこのへんに伸びてきて……

大地 このへんって？

聡 だから、この（股のあたりをさす）あたりなんだけど。

大地 となりって男の人？

聡 うん。

大地 何、それ？ 痴漢？

聡 わかんない。でも、なんていうか、クリストファー・リーブと一緒に、もっこりしちゃいそうだったんで、こう、シートの反対側に逃げただけど、そしたら、今度は手をさわってきて。

大地 うわ。何、それ？

聡 すっごいドキドキして、もう映画どころじゃなくなってる。

大地 それで？

聡 それで、そのまんまずっと映画終わるまでずっと手つないだまま。

大地 「つないだ」って、聡も？

聡 うん、なんとなく。あ、デートで映画見るとってこういうもんなのかなとか思いながら。

大地 男なわけでしょ？

聡 うん。

大地 どんな人？

聡 大学生くらいのやさしそうな人。

大地 それで、手つないでただけなの？

聡 うん。

大地 もっこりは？

聡 何もなし。

大地 ……よかったね。

聡 うん。ああいう人、ホモっていうのかな？

大地 ホモ？

聡 オカマ？

大地 やめてよ、それ。

聡 だって、変じゃない？ 映画館で男が男の手握るなんて。全然知らない人だよ。

大地 一人でさびしかったんじゃない？

聡 そうなのかな？ 僕、小学校6年から一人で上野や浅草や東銀座で映画見てるけど、そんなの初めてだから。びっくりして。

大地 なんでだまっていたの？

聡 何だか内緒にしといた方がいいのかなと思って。

大地 なんで？

聡 僕、いやじゃなかったんだよね。

間

大地 そうなんだ。

聡 映画が終わって、立ち上がって、これからどうなるんだろうと思ってたら、「ありがとう、じゃあね」って言って、歩いてった。

大地 変なの。

聡 ホモだったのかな？

大地 知らないよ。

大地、ラジオのスイッチをつける。

聞こえてくるのは、当時放送されていたラジオ番組「スネークマンショー」のオープニング。

CMが流れているのを、二人なんとなく聞いている。と静かな音楽とともにDJが話し始める。

二人、おどろいてラジオを見る。

久雄が登場。

大地、あわててラジオを消す。

久雄 大地、内藤さんが呼んでるぞ。走りに行こうって。

大地 あ、今行く。

久雄 長谷川くん、いつも悪いね。

聡 いいえ。

久雄 もう、遅いから、そろそろ。

聡 はい。

久雄、大地と何か話したそうだが、また出ていった。

大地 「ゲイのみなさん、こんばんは」って言った。

聡 ゲイって、ホモ？

大地 え、そうなんじゃないの？

聡 何で消したの？

大地 え？ わかんない。

聡 いつも聞いているの？

大地 知らない、初めて。なんなんだろうね？

間

聡 聞かないの？

大地 いい、もう出かけるから。聡も帰れば。

聡 走りに行くって何？

大地 え？ 内藤さんと、走ってるんだよ、毎晩。四ツ木橋のところまで。

聡 ほんとに？ 体育あんなに嫌いなのに？

大地 だから、ちよつとは好きになるかと思って。強くなれるかもしれないじゃん。お父さんも、なんだかうれしいみたいよ。

聡 それは、くやしくないんだ？ お父さんの思い通りになっても。

大地 だって、おもしろいんだもん、一緒に走るの。かっこいいし、内藤さん。聡も行ってみる？

聡 僕はいいや。

大地 そう……。じゃ。

聡、退場。

大地、着替え始める。大地、ジョギングする格好（体操着）に着替えて、茶の間に降りていく。

内藤がトレーニングウェアに着替えている。

久雄と富美子と夏子がいる。

内藤 よし、じゃあ、行こうか？

富美子 毎晩、毎晩よく続くわね。

内藤 つづけることが大事ですから。

久雄 朝から一日仕事して、それからまたランニングするのは、すごいなあ。若くないとできないよ。

内藤 だいじよぶですよ。少しずつ始めれば。どうです、一緒に？

久雄 いや、遠慮しとくよ。

夏子 内藤さんは、かっこいいのに、なんかお兄ちゃんは決まらないね。

大地 うるさいな。

夏子 学校行っていないのに、毎晩走ってるのって変じゃない？ 休むならもっと具合が悪
いってことにしてよ。学校でいろいろ聞かれるのは、私なんだからね。

富美子 聞かれたら、正直に答えればいいの。学校には行っていないけど、元気だよって。

夏子 それって変じゃない？

久雄 そのうち学校にも行けるようになるだろ。

夏子 そうなの、予行練習なの？
内藤 そうなるといいね。（大地に）じゃ、行こうか？
大地 うん。じゃ。

大地と内藤、出ていく。

夏子 いいなあ、愉しそうで。

富美子 夏子も一緒に走れば？

夏子 お兄ちゃんに来るなって言われた。

久雄 男同士が気楽なんだろ。いや、よかったな。いい人に来てもらって。

4場 大地は恋をした

荒川放水路と綾瀬川のあいだの土手。

夜おそい時間。

大きな月が出ている。

前の場面のすぐ後。

内藤と大地が登場。

内藤の後を、少しへろへろになりながらついて走る大地。

土手の上から登場した彼らは、河川敷に降りてひとやすみ。

本来、明かりのないはずの河川敷だが、今夜は月の光に照らされて、とても明るい。

内藤 よし、じゃあ、少し、柔軟をしよう。

大地 はい。

内藤の指示で柔軟体操。たぶん、この時代にはストレッチという言葉はなかったが、今でいうなら、そんなものをいろいろ。

二人、はじめは、各自の屈伸や伸脚や、アキレス腱のばしなどをしているが、そのうち、手を繋いで互いの手を引っ張りあったりする。背中に寄せたりも。

大地はすぐにねを上げる。

大地 あたたた……

内藤 ごめん、ごめん。無理はいけないな。

大地 あの、ずっと思ってたんだけど、こういうのって、普通は走る前にやるんじゃない

のかな？
内藤 ん？
大地 プールに入るときも、入る前に柔軟体操でしょ？ 今これやっても、もう2キロくらい走ってるし。
内藤 あ、そうか。でも、ここまで走ってきたのが、まずは準備体操でカラダをならして、ここで柔軟。それから、本格的に走る。そういうことなただけ。だめかな？
大地 全然だめじゃない。
大地 あ、全然だめじゃない。
内藤 よかった。
大地 内藤さんって、うちに来るまで何してたの？
内藤 何って、別に。普通に働いてたよ。
大地 ずっと、工場？
内藤 うん。他にできることないからね。
大地 家族は？
内藤 いないよ。
大地 ずっと一人？
内藤 まあ、そんなところ。
大地 つきあってる人とかいないの？
内藤 いないよ。
大地 そう。
内藤 大ちゃんは？
大地 え？
内藤 あ、大地くんは？
大地 いいよ、大ちゃんです。
内藤 どうなの？
大地 好きな人はいるけど。
内藤 すごいな中学生で。
大地 普通だって。
内藤 どんな子？ 同級生？ 美土里ちゃんだっけ？
大地 違うよ。全然違う。
内藤 あんなに仲いいのに。
大地 仲いいだけ。好きな人は、もっと他にいるから。
内藤 そうか。

間

二人、ならんで座っている。

内藤 学校、行って見たらどうかな？

大地 ?

内藤 別にいやならいいんだけど。もう、そろそろ行ってみてもいいんじゃないの？

大地 お父さんに言われたの？

内藤 え？ あ、うん。そう。

大地 自分で言えればいいのに。

内藤 話しずらいって言ってたよ。

大地 よく言うよ、人のこと。

内藤 毎日、これだけ走って、自信ついたんじゃないの？ お父さんも見直してるみたいだよ。口には出さないけど。たしかに、ぐーんと男らしくなった気がするって。

大地 ああ、もう、そろそろ自分からそろっと行ってみようかと思ってたのに、そういうこと聞いちゃうとまた、いやになってくる。

内藤 どうして？ 行こうと思っただんなら、行けばいいじゃない。

大地 そうなんだけど。

内藤 ま、いいや。よし、じゃあ、もう一走り。今度は本気で。

大地 僕、ここで待ってるよ。

内藤 どうした？

大地 いいから。行ってきて。今日もあの橋のところまででしょ？ ここで見てるから。

内藤 ……わかった。じゃあ。

見送っている大地。

月が明るい。

不思議な音楽が聞こえてくる。

と、土手の向こうから、女が二人現れる。不思議な格好。時代劇のような着物姿。

年かさの女ともう一人若い女。後でわかるが名前はそれぞれお柳とお玉。

お柳 ああ、いい月夜だ。せいせいした気持ちになるねえ、お玉。

お玉 ええ、お柳さん、ほんとうに。いい眺めですね。

お柳 月の名所の綾瀬はすぐ目と鼻の先。川の流れに月の光がこぼれて、銀の砂をまいたようだよ。さすがだねえ。

大地、不思議な二人の登場と、時代がかったセリフにあっけにとられている。

お柳 おや、お兄さん、こんばんは。
お玉 こんばんは。
大地 こんばんは。
お柳 どうしたんだい、そんな顔をして？
大地 チンドンやさん？
お柳 何だい、そりや。私たちは芸者だよ。
大地 ゲイシヤ？
お柳 近頃の若いもんは、芸者も知らないのかい。芸をする者と書いて、芸者。
大地 ゲイをする？
お玉 三味線とか踊りとか。
大地 ああ……
お柳 ようやくわかったみたいだよ。
お玉 よかった……
お柳 うかない顔してどうしたんだい？ こんないい樹の夜に川つぷちで一人で考えごと
かい？ ここで会ったのも何かの縁だ、よかったら話を聞くよ。
大地 けっこうです。
お柳 遠慮しっこなしだよ。
大地 遠慮じゃないです。
お玉 お姉さんは、酒のさかなに人の身の上話を聞くのが大好きなんです。たちの悪いよ
つばらいに絡まれたと思って、少し、つきあつてあげてください。
お柳 悩み事を当ててみようか？ 恋の悩みだね？
大地 恋？
お柳 そうだよ、違うかい？
大地 そうです。
お柳 言ってみるもんだね、当たったよ。相手は誰だい？
大地 ほんとに話聞く気があるんですか？
お柳 ああ、あるとも。当たり前じゃないか。ねえ、お玉？
大地 ……
お玉 酔っぱらいに絡まれたと思って。
大地 僕、人を待ってるんで。
お柳 待ち人かい？ 逢い引きかい？ こりや、とんだ野暮をしたね？ でも、その顔じ
や、待ちぼうけをくらってるねえ。おやおや。
大地 違うよ。もうじき帰ってくる。ほら。

大地、遠くを走っている内藤を指さす。

お玉 あら、いい男。
お柳 おや、ほんとだね。
お玉 え？ あの男前と逢い引きってわけなの、あんた、ちょっと？ お姉さん、どうしましよう？
お柳 いいから話を聞こうじゃないか？ まあ、お座りな。
大地 あの、あなたたち誰なんですか？
お柳 人に聞く前に、まず自分から名乗ったらどうなんだい？
大地 ちえっ、僕は、高橋大地。
お柳 いくつだい？
大地 十四歳。
お柳 生まれはこのあたりかい？
大地 そうだよ。
お柳 じゃあ、私たちとは古いなじみだ。
大地 え？
お柳 お前は、あの男に惚れてるのかい？
大地 そうだよ。悪いか？
お柳 悪くないさ。お前が悪いと思わなけりやね。
お玉 どうなの？

間

大地 ねえ、おばさん、ゲイって知ってる？
お柳 おばさんじゃない。
お玉 お姉さん。
大地 ゲイっていうのは……
お玉 踊りや三味線？
大地 違うよ、ホモとかオカマとか。
お柳 横文字は苦手だねえ。
大地 横文字じゃないよ。男が好きな男のこと。僕はそうだと思うんだ。
お柳 それで悩んでるのかい？
大地 え？ うん。
お柳 男が男に惚れて何が悪いんだい。ねえ、お玉。
お玉 ええ、恋する心に変わりはありませんもの。
大地 もしかして、それは僕の心の声？

お柳 どう聞いたってかまわない。色と恋とが芸者の命。命をかけてもかまわない。そう
思えるだけの相手に巡り会えたんなら、相手が男だろうが女だろうが、かまいやし
ない。それがしあわせでもんさ。

大地 僕は、しあわせなのかな？

お柳 どれ、あの男をもう一度見てご覧な。そしたら、わかるんじゃないかい？

大地、走っている遠くの内藤を見てみる。

大地 子供の頃、まだ三輪車に乗って遊んでたくらいだから、多分、3つか4つ。友達と
競争をして、うちの前の道を走ってたら、道の脇のどぶ川に落ちたことがあるんだ
。そのどぶは、今じゃすっかりふさがれてもう跡形もないんだけど、深くて水が真
つ黒で、大人でも落ちたら危ないって言われてた。三輪車ごと落ちて、いっぱい水
を飲んで、目の前が真っ暗になって、もう死ぬのかなと思ったときに、僕の手をつ
かんで引き上げてくれた人がいた。強い腕で水の中から。どぶに面してた町工場の
職人さん。顔も名前も知らないまんま、工場はなくなって、その人が誰かもわから
なくなっただけ……

お玉 それがあの人？

大地 わからない。きっと別人なんだけど、会ったときから、忘れてたはずのいろいろを
急に思い出すようになって。でも、あの人もまた僕の手を取って引き上げてくれる
ような、そんな気がして。いつのまにか……

お柳 あの男に惚れちまってたってわけだ。

大地 ……うん。

お柳 やっぱりお前は、一度水をくぐった人間だったんだね。道理で近しい気がしたよ。

お玉 ええ。

大地 お柳さん、僕はどうしたらいいんだろう？

お柳 思いのままにしてごらん。月並みで悪いが、私たちに言えるのはそれだけだよ。

大地 思いのままに？

お柳 そうだよ。恋ってのは、そういうもんだろ。ねえ、お玉。

お玉 ええ、お柳さん。

内藤がもどってくる。

内藤 よし、じゃあ、行こうか？

大地 あ、内藤さん。

内藤 待たせて悪かったね。一人で何してたんだ？

大地 え、ちよつと考えごと。一人って……

お柳 私たちは、恋してる人間にしか見えないらしいんだよ。

お玉 不便ですnee。

大地 ええ？

お柳 そいじゃ、また会おうよ。出かけてなけりやいつでもいるから。来たら、呼んでおくれ。

お玉 ごきげんよう。

お柳とお玉、歩いていく。

大地 あ、そっち川。

二人、振り返らずに川の中へ消えていく。

大地 え？

内藤 どうしたの？

大地 え？ あ、発声練習。(大声で) え？ あ？ あ、い、う、え、お！

内藤 そうか、文化祭近いから？ クラス演劇？

大地 え、うん。いや、知らない。学校行かないし。

内藤 そうか。

美土里がやってくる。体操着を着ている。帽子をかぶって、男の子のように見える。

美土里 おっす。

大地 なんだよ、美土里じゃん。

内藤 走ってるの、すごいなあ？

大地 何だよ、その格好？

美土里 毎日、うちでルームランナーで走ってたんだけど、お母さんが壊しちゃって。だから、ほんとに走ってみようかと思って。

大地 おばさんは？

美土里 恥ずかしいからいやだって。でも、女の子が一人で夜道は危ないから、男のかっこして行行って言って。

内藤 ほんとだ、誰も女だとは思わないよ。あ、ごめん。

美土里 気にしてないから。(大地と並んで) どっちが男子かな？

内藤 それは……。二人とも。

美土里 勝ったね。

大地 何だよ、ばーか。

美土里 何だと？

内藤 もう帰るところなんだけど、どうする？ 一緒に走る？

美土里 え、何、もう？ じゃあ、しょうがない帰るとするか。

大地 その男くさいしゃべり方おかしいよ。

美土里 ほっとけよ。

内藤 それじゃ、行こうか？

大地 うん。

内藤、走っていく。大地も。

美土里 (大地に) 大地。

大地 なんだよ。走れよ、ちゃんと。

美土里 学校、来ないか？

大地 え？

美土里 珠代、困ってるよ。

大地 来たくなったらで大丈夫って言ってたよ。

美土里 あんたのこと頼りにしてんだよ。今度は珠代が学校来なくなるかもしれない。

大地 うそ？

美土里 ほんと、ほんと。職員室でも大変らしい。担任としてやってることやってるのかわつてPTAからも突き上げくらって。石坂が担任になるかもしれないって噂もあるって。

大地 でもさ……

美土里 大地がいるとこないじゃ、全然違うんだって。

大地 そんな……

内藤が戻ってくる。

内藤 どうした？

大地 わかった、行けばいいんだろ。行ってみるよ。

美土里 明日？

内藤 学校？

大地 うん。

内藤 よし！ 帰ったら、報告だ。

大地 いいよ、そんな。

内藤 いや、まず言葉にする、それが大事なんだから。

美土里 そうだよ、朝になって、やっぱりやめたはなしだからね。

大地 わかってる。

内藤 よし、じゃあ、行くぞ！

内藤、走っていく。二人も続いて。

美土里 ねえ、さつきすつごい派手な着物来た人いなかった？ あのあたりに。

大地 え？

美土里 あのへん、川のあたり。気のせいかな？

大地 気のせい、気のせい。行くよ。

大地、走っていく。美土里もあとをついて駆けだしていった。

5場 大地は学校に行った

前の場面の翌日。

中川中学二年四組。

ざわざわとした教室。

机と椅子が乱れている。

生徒は、長谷川聡、北村泰司、望月伸也、西澤澄江、飯岡真由美、秋本美土里。

授業時間の始まりを知らせるチャイム。

担任の星野珠代が入ってくる。副担任の石坂は、教室の後に立つ。

珠代 みんな席について。

誰も席に着かない

珠代 席につきなさい。チャイムはもう鳴ってるのよ。

石坂、後から、颯爽と走ってきて、教壇に立つ。

石坂 こら、席につけ！ ホームルームを始めるぞ。

珠代 すみません。

美土里 石坂って絶対「熱中先生」の影響受けてるよね？

澄江 水谷豊？ うっそお？

石坂 (咳払い) 日直は誰だ？

澄江 長谷川くんです。

石坂 長谷川！

伸也 長谷川、いいかげんに髪切れよ。お前だけ、校則違反してんのわかってんのかよ？

真由美 そうだよ、目に入って気持ち悪くないの？

間

珠代 はい、切るから、そのうち。今はいいから、日直の仕事ね。

伸也 なんだよ、ひいきかよ？

石坂 長谷川、号令かけろ。

長谷川 起立。

一同、立つ。

伸也は立たない。

長谷川 礼。

一同、礼をする。

伸也はしないで、床に座っている。

長谷川 着席。

一同、座る。

珠代、望月の近くに行く。

珠代 望月くん、ちゃんと座りなさい。

望月 おれ、いいよ、ここで。話なら聞いているから。

珠代 だめ、ちゃんと座りなさい。

望月 いやだね。泰司も来いよ。

泰司 ええ、もつちゃん……

石坂 こら、望月。人を巻き込むな。北村、よせ。

泰司 はーい。

石坂 望月、座れ。

伸也 ……

石坂 がつんだぞ。

望月 んだよ！

渋々座る、望月。

石坂 どうぞ、星野先生。

珠代 はい。

珠代が教壇に立ったとたんに、急にざわざわしはじめる。

珠代 静かにしなさい。

静かにならない。

珠代 ホームルームを始めます。今日の議題は、文化祭の出し物についてです。

望月 めんどくせえな。いいじゃん、何もやらなくて。

真由美 あーあ、かつたるい。

珠代 そういうわけにはいきません。

泰司 みんなで踊ったりするのは？

澄江 踊るって何を？

泰司 え？ 西條秀樹の「ヤングマン」とか。（歌いながらポーズ）

美土里 誰が西條秀樹やんの？

泰司 誰でもいいじゃん。

望月 長谷川は？

長谷川 ……………。

澄江 あと、あれはジュディ・オングの「魅せられて」

泰司 ああ、あれね（適当に歌いながら、適当な振りをする）。

望月 「魅せられて」なら、高橋がやりやいいじゃん。

澄江 あ、いいかも。いいかも。

望月 じゃ、決定！

澄江 先生？

珠代 ……。

と、そこへ、大地がやってくる。

珠代 高橋くん。

大地、黙ったまま、自分の席につく。

美土里 もう来ないかと思った。

石坂 高橋、遅刻か？

珠代 いいじゃないですか。来たんだから。

望月 いいところに来たじゃん。今、お前の話してたところ。

泰司 ジュディ、ジュディ！

大地 (聡に) なに？

聡 文化祭の出し物。ジュディ・オングの「魅せられて」

大地 え？

美土里 まだ、決まったわけじゃないから。

望月 じゃあ、他に何かあんのかよ？

珠代 この前のホームルームで演劇をやるうっていうことになったでしょ？ でしょ？

望月 覚えてねえよ。

珠代 決まりましたよね。

石坂 ええ。でも、それは星野先生が……

珠代 みんなもやってみようって言ってくれたでしょ？ 今週一週間で、図書館でやれそうな台本や、原作になりそうなお話を見つけてくるっていうのが、宿題だったと思うんだけど、誰か、何か、これは！っていうのを提案してください。

一同、沈黙。

珠代 誰かいない？

一同、沈黙。

珠代 (大地に) 高橋くん、先週いなかったけど、そういうことになって。何か、ないかな？

大地 別に……。

珠代 何も？

大地 そんな、急に言われても。

石坂 そうですよ。元々、演劇なんて無理です。だから、私が提案した、理科の実験の記録をまとめて展示するというのが……

望月 文化祭だぜ。実験なんてやってられつかよ。

真由美 かったるすぎ。

珠代 (高橋に) 何かない？ だめかな？

大地 ……はい。

珠代 そう。ううん、大丈夫。そんなことだろうと思って、私が用意してきました。

真由美 まだだよ。

望月 珠代、暴走すんなよ。

珠代、澄江に台本のようなものを渡す。

珠代 西澤さん、みんなに回して。

澄江から全員にまわる台本のようなもの。
生徒たち、文句を言いながらも広げてみる。

珠代 図書館の中学校演劇脚本集っていうのを読んだんだけど、ちょうどいいのがなくて

。私が、書いてみました。

望月 おもしろえのかよ。

珠代 たぶん。えーと、このあたり、東京の下町には、いくつもの伝説があります。深川の七不思議。英語の授業でやった「ムジナ」のもとになってる「おいてけぼり」の舞台は、錦糸町の駅前です。

泰司 へえ、そうなんだ。

美土里 「ムジナ」やるの？

珠代 やりません。別の話です。葛飾区には、実はこれといった伝説がないんだけど、荒川の向こうの鐘ヶ淵には、名前の通り、川に沈んだ鐘の伝説があります。

どこからともなく、鐘の音が聞こえる。

珠代 私が調べて、まとめたお話はこんなかんじ。その川は毎年秋になるとあふれて、江戸の人たちはとても苦労していました。淵に住む龍神をさめるために、日に三度、夜に三度、鐘をつくという約束をしました。仲のいい鐘楼守の夫婦がその鐘を約束通りついていたので、しばらくは、何事もなかったのですが、ある年の夏、江戸はちっとも雨が降らなくなり、人々は水を求めて苦しみました。鐘をつくのをやめろという村人とやめたら洪水が起これるという夫婦は対立、ついに妻は殺されてしまいます。怒った夫は鐘をつくのをやめて、江戸の街を大洪水が襲ったのでした。

間

澄江 先生、その話、なんだか聞いたことあります。

珠代 このあたりの伝説だからね。

澄江 本で読んだような気が……

珠代 えーと、似たような話を泉鏡花という人が書いてるんですが、こっちがオリジナルです。龍神や悪い村の人や、いろんなお化けがいっぱい出てきて、盛り上がると思っただけ。どう？

間

珠代 反対意見がないので、決定。

一同 えーっ？！

珠代 何？ どうしたの？

望月 誰もいいなんて言っていないだろ？

泰司 そうだよ。

珠代 じゃあ、他に何かある？ 私ね、これだったら、とつてもうまくいくと思うの。ぜったい受けるって！

望月 勝手にやれよ。

珠代 だめよ。あなた主役なんだから？

一同 ええっ？

石坂 ちよつと暴走してませんか、星野先生？ ちよつと落ち着いて。

珠代 だいじょうぶです。望月くん、私、台本書きながら、あなたをイメージしてたの。村を守ろうとする主役の男にはあなたがぴったりだなって。

望月 おれ？

珠代 いい男よ。

真由美 やってみりゃいいじゃん。

望月 でもさあ。

美土里 その妻は誰なんですか？

珠代 高橋くん。

一同 ええっ？

望月 やだよ、気持ち悪い。

美土里 その言葉、そっくりそのままお返しするよ。

望月 お前が出てくんなよ。

美土里 なんだと？

大地 なんで、僕なんですか？ なんで女役？

泰司 オカマだからに決まってるじゃん。

珠代 違います。えーと、日本には、いえ、世界中には、声変わりする前の男の子が女役を演じる演劇がたくさんあります。イギリスのシェークスピアもそう、日本の歌舞伎もそうです。この男の子が演じる女役っていうのは、その時しかできないこと。大人になったらもうできない。今だからできる、とつてもステキな才能なんです。

私は、高橋くんに、その才能があると思います。みんなは彼のこと男らしくないとか言うけど、そんなことない。彼が演じる、女の人はずっとときっとステキなものなると思うの。

大地

……。

望月 高橋、やんのかよ？

大地 望月は？

望月 ……お前がやるならやってもいいぜ。

一同、驚く。

にらみ合う、大地と望月。

大地 じゃあ、やってみる。

珠代 ありがとう。じゃあ、よろしくね。ありがとう。よかった！！ はい、じゃあ、

今日のホームルームはここまで。みんなうちで台本読んできてね。その他の配役は明日決めます。長谷川くん

長谷川 起立。礼。着席。

一同、挨拶して、散っていく。

残った珠代と石坂。

石坂 ほんとにだいじょぶなんですか？

珠代 ええ、よかった。これで望月くんと高橋くんの関係もいいものになっていくわ。

石坂 そうじゃなくて、あなたですよ。

珠代 え？

石坂 こんな面倒なこと始めて、ちゃんと責任取れるんですか？

珠代 責任？

石坂 そうですよ。まず第一に毎日学校に来れるんですか？ 遅刻早退なしに。

珠代 だいじょぶです。

石坂 どうなっても知りませんよ。仲直りさせる計画が失敗して、高橋がまた登校拒否しだしたらどうするんです。

珠代 約束したんですから、きつとやるはずですよ。

石坂 あなたはどうしてそう甘いのか？

珠代 先生はどうしてそう子供を信用しないんですか？

石坂 これは信用じゃない、思いつきだ。自分のための。そうでしょう？

珠代 たしかに、そうかもしれないですね。私の父は、旅役者だったんです。今はカラダをこわして家で寝ていますけど。子供の頃は、一年中旅ばかりで、家にはちっとも帰っ

てこなかった。ろくでなしの父です。でも、たまに見に行く父の舞台姿はそれはそれはかっこよかった。うちでゴロゴロしているときとは大違い。今、家でぶらぶらしている父は、それはつまらなそうで、芝居をとったら何もなくなってしまうたよ。うな。そのくらい芝居っていうのは、大きなものなんだってことがわかったんです。力を与えてくれる。だから、高橋くんだって。

石坂 まあ、いいでしょう？ 言っておきませんが、これはあなたの一存で決めたことですからね。私は知りませんよ。

珠代 はい。わかっています。

石坂 じゃあ、明日。

石坂、出ていく。

珠代、残る。

6場 土手

翌日の放課後。

大地、美土里、聡が歩いてくる。学校の帰り。

聡 元気だしなよ。

美土里 お前に言われたくないね。

聡 よかったじゃない、役ついて。僕は照明係だけど。

大地 そうだよ。いい役じゃん？

美土里 寺の小坊主のどがいい役なんだよ？

聡 背が低いからぴったりって、珠代言ってたじゃん。

大地 イメージどおりって。

美土里 ちくしょう、文化祭までに大きくなってやる。

聡 無理だって。

大地 男役やりたかったんだろ？ よかったじゃん。

美土里 私がやりたかったのは、もっといい男の役。小坊主じゃない。

大地 いいじゃん、おもしろそうで。

美土里 あんたの方がいい役じゃんか？

大地 僕はいいよ。

美土里 かつこつけちゃって。いいの、普段からもっと女っぽくしなくて？

大地 うるさいな。

美土里 あ、別にいいか、そのまんまで。あ、いいか。

大地　なんだよ、それ？

美土里　ねえ、なんで、やだって言わなかったの？

大地　え？

美土里　あんなにオカマオカマって言われるのに、今度こんな芝居やったら、もう一生決まっちゃうよ。いいの、それで。

大地　そんなことないって。

美土里　カラダ鍛えて、男らしくなろうとしてたんじやないのかよ？

大地　それはそれ、これはこれだって。

美土里　もうわけわかんないよ。

大地　お前こそわけわかんないよ。

聡　うん。

美土里　なんだよ、それ。

珠代がやってくる。

珠代　お疲れ。何してんの、こんなところで。

美土里　帰り道だよ。

珠代　ずいぶん道草食ってるんじゃない。

美土里　珠代は？

珠代　私も帰り道。うち、すぐそこだもん。

大地　へえ、そうなんだ。

珠代　遊びにこない？　よかったら。

美土里　教師が生徒に寄り道すすめていいわけ？

珠代　いいのよ、教師なんだから。うちの父親、会ってみたいなあって、高橋くんに。

大地　お父さん？

美土里　元旅役者？

珠代　そうそう。芝居教えてやろうかなんて言って。

聡　いいんじゃない、行ってみれば？

大地　いいよ。遠慮しときます。

珠代　あら、そう。来てくれるとうれしいんだけど、ま、そのうちね。

大地　はい。

珠代　高橋くん、元気になったね。昨日、久しぶりに来たばかりなのに、むちゃくちゃ言うってごめん。もし、今日、来なかったらどうしようかと思ってただけど、来てくれて、ほっとした。明日もだいじよぶよね？

美土里　珠代はどうなのよ？

珠代 私は、だいじよぶ。望月くんのこと、たいへんだと思うけど、よろしくね。
大地 僕別に何もしないけど。
珠代 いいの、それで。だいじよぶ、だいじよぶ。

内藤と夏子がやってくる。

夏子 あ、お兄ちゃん、こんなところで何してんの？
大地 お前こそ何してんだよ、内藤さんと二人で。
夏子 新倉さんのところに届け物があるからって、二人でおつかい。いいでしょ？
内藤 自転車で二人乗りと思ったんだけど、パンクしちゃって。
大地 また太ったのか？
夏子 違うよ。何か踏んづけたみたい。ほんとだって。

珠代、内藤を見ている。内藤も珠代を。

夏子 どうしたの？
内藤 え、うん。
珠代 ひさしぶり。
内藤 元気にしてた？
珠代 まあね。
内藤 何？
珠代 今、担任なの、高橋くんの。
内藤 そうなんだ。
大地 知り合いなの？
内藤 うん、ちよつとね。
珠代 そう、ちよつと。
夏子 何々、あやしいな？
内藤 そんなんじゃないって。行くよ、遅くなるから。じゃあ。

内藤と夏子歩いていく。

美土里 何、へえ、知り合いなんだ。
珠代 内藤くんがどうして？
大地 うちで働いてるんだよ、住み込みで。
珠代 いつから？
大地 先月から。

美土里 どんな知り合いなの？

珠代 え？

美土里 いいから、ちよつと話してみなよ、言いふらしたりしないからさ。

珠代 そう？ 実はね……。あ、なんでもない、ちよつとした知り合いってだけ。じゃ、私も行くわ。じゃあね、また明日。

珠代、歩いていく。

美土里 なんだ、あれ？ ねえ、ちよつと追いかけて聞いて見ようよ。

聡 うん。

大地 いいよ。

美土里 いいじゃん、行くよ。ほれ。

大地 僕はいいから。

美土里 じゃあね、また明日。

聡 じゃあ。

聡と美土里、走っていく。

一人残った大地。

河川敷に降りて、川に近づく。

大地 お柳さん、お柳さん！

返事はない。

大地 おかしいな。おばさん、いないの？！

お柳 おばさんじゃあない。

お柳とお玉、現れる。

お玉 お姉さんですよ。

お柳 何度言ったらわかるんだい。それより、何の用だい？

大地 別に用はないんだけど。来たら呼んどくれって。

お柳 用事もないのに、呼んでいいとは言ってないだろ。

大地 そうだけど。

お柳 まあ、いいだろ。夕方の散歩にいい頃合いだ。すっかり日が長くなって、夕焼けが

お玉 きれいなこと。空が燃えているようだよ。

ほんとうに。

大地 学校で、芝居をやることになったんだ。
お柳 おや、そうかい。それは楽しみだ。
お球 どんなお話なの？

大地 このあたりの伝説で「鐘ヶ淵」の話。

お柳 何、鐘ヶ淵？（と決まる）

大地 どうしたの？

お柳 お前さんの役はなんだい？

大地 殺される鐘楼守の妻。

お柳 おや、女形かい？ それはおもしろそうだ。ぴったりだね。

お玉 ほんとうに。

大地 ……

お柳 どうしたんだい、うかない顔して。そうだ、あんたのいい人はどうしてる。その顔つきじゃあ、まだ恋は成就してないんだね。

大地 なんて、うれしそうなのかな？

お柳 いいよ、話を聞いてやろうじゃないか？ いいかい、私はあんたの鏡だよ。川にうつる自分の姿に話すように、思いのたけを吐き出してごらんな。

お玉 そうそう、けっして他言はしないから。

大地 ……いいよ。今日は。

お柳 おや、残念だね。今日の酒のさかながふいになった。

お玉 お姉さん。

お柳 じゃあ、また会おうよ。今度は用があるときに、呼んどくれ。

お柳、お玉、退場。

大地が残る。

望月が歩いてくる。

望月 高橋、何してんだよ？

大地 なんでもない。

望月 誰と話してたんだ？

大地 え？

望月 なんかでつかいばあがふたり？

大地 見えるの？

望月 見えるのって、いただろ？ お前、頭おかしいんじゃない？

大地 あ、ちよつとね、知り合い。

望月 変な友達いるんだな？

大地 あのさ、もつとちゃんとやってくれるかな？
望月 え？

大地 今日の練習。僕だって、いやだけど、やってるんだから。

望月 おれだって。

大地 ちゃんとやってないじゃん。

望月 やってるだろ。

大地 読めない漢字にはふりがなふってやったんだから、せめてちゃんと読むくらいはしてよ。どうしてできないかな？

望月 うるせえな。ちゃんとやるよ。やりやいいんだろ。

大地 明日は、頼むからね。

望月 なんだよ、えらそうに。

大地 言われたくなかったら、ちゃんとやる。

望月 わかったよ。じゃあな。

望月、歩いていく。

大地 ねえ、もつちゃん。

望月 なんだよ？

大地 今、誰か好きなやついる？ 飯岡？

望月 ばーか。いねえよ。そんなの。

望月、走っていく。

大地、一人残る。

7場 茶の間

卓袱台の前に久雄を富美子。

久雄は新聞を読んでいる。

内藤がやってくる。風呂上がり。

内藤 上がりました。お先にすみません。

富美子 熱くなかった？ お父さん熱くないと風呂じゃないなんて言うんだけど。

内藤 ちようどよかったです。

富美子 あら、そう。よかった。仕事終わって、先に入ってくれば、だんだんぬるくなるのに。

久雄 仕事が終わったら、まずビール、それから風呂だろ。
富美子 もうほんと不便なんだから。

上から、夏子が降りてくる。

夏子 内藤さん、今日もお兄ちゃんと走りに行くの？

内藤 うん。今、部屋で勉強してるみたいだけど。

夏子 お兄ちゃん、文化祭で女役やるんだって。勉強じゃなくて、その練習してるんだよ。
。気持ち悪い。ねえ、私も一緒に行っちゃダメ？

内藤 ダメじゃないけど、けっこうきついと思うよ。大ちゃん、どんどん走れるようになったから。

夏子 平気平気、お兄ちゃんでしょ？ 私なんてね、私なんてね、こないだの体育祭のクラス対抗リレーのアンカーだったんだから。

内藤 へえ、それはすごいな。大ちゃんは。

富美子 大地は、お休みしました。

内藤 あ、そうか。

久雄 内藤くん、どういっばいやらない？

内藤 あ、僕はいいです。
久雄 いいじゃないの？ 何て言うのかね、仕事のあとに、ビールをいっばい。こう息子が大きくなったら、一緒についてというのが、夢だったんだけど、大地、どうだかわからないしな。

内藤 そんなことないですよ。一緒に飲めばいいんじゃないですか？ まだ、中二だから、大きくなったら。

久雄 あいつは、大人になっても、ぜったいに俺とは一緒にビール飲んだりしないよ。うん、間違いない。

富美子 まだ中二ですよ、わからないじゃないですか？

夏子 私が飲んであげるよ。

久雄 男同士っていうのがいいんだよ。

夏子 何それ、じゃあ、いいよーだ。

久雄 だから、内藤くん、どう一杯。

内藤 あ、そう来ますか？ じゃあ……

久雄 おい、コップもってこい。

夏子 私も。

富美子 バカ言ってるんじゃないの。（内藤に）これから走るのに、だいじよぶ？

内藤 ちよっとだけなら。

富美子、台所へ。
玄関から声。

岡崎　こんばんは、桜井電器店です。

岡崎が登場。

夏子　あ、岡ちゃん。

久雄　ああ、夜遅くわるいね。

岡崎　いえいえ。(内藤に)　こんばんは。

内藤　こんばんは。

久雄　じゃあ、これ(テレビ)　持ってってもらって、新しいの。

岡崎　はい。

久雄　下取りっていくらくらいになるの？

岡崎　あ、これけっこう古いんで、そんな大した金額にはならないんですけど。

久雄　あ、そうか。大阪万博もこれで見たんだよな。

夏子　私、おぼえてない。

久雄　お前も見てたぞ、大地と一緒に。

夏子　へえ。

岡崎　じゃあ、ちょっと配線抜いたりしますんで……

岡崎、部屋にあがり、テレビに近づく。
と富美子が台所からやってくる。
大地も部屋から降りてくる。

富美子　あら、岡崎さん、どうしたの？

岡崎　あの、テレビを持ってきました。

富美子　テレビ？

久雄　そうだよ。もう大地も学校に行くようになったんだから、いいだろ。さっき桜井さんに電話して、持ってきてもらったんだよ。

富美子　また、一人で勝手に決めて。

大地　そうだよ。

久雄　ちよつと待て、一人で決めようが、二人で決めようが、いいじゃないか、テレビだぞ、テレビ。

富美子　わかつてます。

久雄　いいか、大地、お前ががんばったから、テレビが家にもどってきた。このテレビは

大地 言ってみりや、おまえのがんばりの結果だ。よかったな。

大地 いららないよ。

久雄 何言ってるんだ？ テレビだぞ。

大地 わかっている。でも、そんなのいららない。

久雄 へ？

大地 言っとくけど、僕いつまた学校行かなくなるかわからないから。そのときに、テレビ買ってやったのについて言われたくないし。

久雄 そんなこと言うわけないだろ？

富美子 いや、言うね。

大地 うん。

久雄 なんだ、お前たち。

富美子 私も大地の意見に賛成。悪いけど、岡崎さん、持って帰ってくれるかしら？

夏子 ええ、いいじゃない、買ってくれるんだから。買ってもらえば。山口百恵の「赤い運命」見たい。

久雄 そうだよ。プロレス見たいんだよ。

大地 やっぱりそれじゃん。

久雄 お前は、いいのか、テレビ見ないで。

大地 いいよ、ラジオあるし。

富美子 もうそろそろ受験の準備が始まるから、みんなラジオ聞いているのよね。深夜放送。

大地 だから、いららないよ。テレビ。

岡崎 (内藤に) どうしましょう？

内藤 あ、僕もテレビあんまり見ないんで……

富美子 じゃ、決まり。テレビはまだいいわ。持って帰ってちょうだい。

岡崎 わかりました。(内藤に) どうも。

内藤 はあ。

久雄 あ……

間

久雄 まあ、いいだろ。そういうことなら、テレビはもうしばらくなしだ。

夏子 お父さん、どうしても少しがんばれないかな？

久雄 せいっぱいだ。内藤くん、まあ、飲もう。

内藤 はい。

二人、ビールを飲む。

富美子 いいわよ、テレビなくなつて。そのぶん、みんなでおしゃべりするようになったと思わない。

夏子 ほかにすることないし。

富美子 なんだか不思議ね、内藤さんが来てくれたから、すごく家の中が明るくなった気がするの。

内藤 そんなことないですよ。

久雄 いやいや、ほんとだつて。いや、よく来てくれた。そうだ、今度、工場を建て増そうかと思つてるんだ。下請けの工場はどこも不況で、こないだも知り合いの下請けがつぶれてね。ここを乗り切るには思い切つて、大きな機械を入れるしかないと思ふんだ。コンピュータ制御の新しい機械。

富美子 ほんとうに話してるのよ。もし、よかつたら、ここに腰落ち着けてもらつて、そつちの勉強あらためてもらえたらどうだろうつて。

久雄 新倉さんとことも、うまくやりくりして、なんとかしようつて話なんだよ。

内藤 はあ。僕なんかでいいんですか？

久雄 いいに決まつてるよ、なあ？

夏子・富美子 うん。

富美子 私からもお願いするわ。

内藤 僕でよければ……

久雄 よし、まあ、飲んで。

内藤 あ、もう結構です。そろそろ走りに行かないと。

久雄 天気悪いんじゃないか？

富美子 そう、そう、台風来るつて。

夏子 うそ、そうなの？ テレビないからわからない。

富美子 新聞読みなさい。

内藤 平気ですよ。かえつて涼しくて。行こうか？

大地 うん、じゃ、着替えてくる。

大地、部屋に向かう。

玄関から声。

珠代 ごめんください。

富美子 はい。

珠代が入ってくる。

富美子 あら、星野先生。

珠代 すみません。夜遅くおじやまして。

富美子 大地ですか？ 大地！

珠代 いえ、あの…… 内藤さん。

富美子 え？

大地が降りてくる。

珠代 ちょっといいかしら？

内藤 あ、えーと……。

富美子 何かな？ よくわからないんだけど。

内藤 あ、ちょっと出てきます。すぐ戻りますから。

珠代 すみません。

珠代と内藤、出ていく。

久雄 なんなんだ？

富美子 さあ？

夏子 星野先生、内藤さんと知り合いなんだって。美土里ちゃんが言った。

富美子 あら、そうなの。

久雄 ほう、どんな知り合いだ？

夏子 知らない。ちょっと見てこようか？

富美子 やめなさい。いいわよ。

夏子 はーい。

間

夏子 あーあ、内藤さんいないと、急につまんなくなるよね。

久雄 そうだな。

富美子 そうね。

久雄 テレビがあつたらなあ。

富美子 それは言わない。そうだ！

富美子、ばたばたと二階に上がっていく。

久雄 どうしたんだ？ 母さん？

夏子 わかんない。

富美子、ギターを抱えて降りてくる。

久雄 なんだそれ？

富美子 ちよっと弾いてみない？ はい、お父さん。

久雄 俺はいいよ。

夏子 何、お父さん弾けるの？

久雄 俺はだめだ。

夏子 お母さんは？ 私はちよっとだけね。いいじゃない、秋の夜に、ギター弾くの。ロマンチックじゃない。

久雄 近所迷惑だ。

富美子 平気よ、工場の音も電車の音もあんなにうるさいんだもん。テレビの音だって外にまる聞こえでしょ。ギターくらいなんでもない。大地も弾いてみる？ もてるわよ、きつと、女の子に。

大地 僕はいいよ。

富美子 そう、かっこいいと思うんだけどなあ。

富美子、ギターを少し弾いてみる。

8場 保健室

ついたてが並んでいる保健室。

望月と大地、それに石坂がやってくる。

望月はふてくされて、大地は少し泣いたあとのようだ。

石坂 星野先生？ いるんでしょ？ 星野先生？

珠代、ついたての影から出てくる。

星野 (望月と大地を見て) あの何か？

石坂 やっぱりここでしたか。まったく。

星野 五時間目はないんで、ちよっと休んでました。あら、どうしたのあなたたち。

石坂 望月が高橋をなぐったんですよ。だいじょうぶか、高橋。

高橋 平気です。

望月 わざとじゃねえよ。

星野 なんて、そんなことするの？

石坂 星野先生が給食の時間、ちゃんと教室にいないからですよ。西澤に呼ばれて行った
ら、牛乳瓶が何本も転がって、えらいことになってる。

望月 早飲み競争したら、北村が笑わしたんだよ。

石坂 とにかく、その後かたづけをしようと高橋が手を出したら、望月たちがそのまま
いいっていいって、言ってるうちに手が出たらしい。

望月 いちいちうるせえんだよ、こいつ。

石坂 高橋くん、だいじょうぶ？ 今日、大貫先生お休みだけど、何かクスリとか塗る？
ちよつと腫れてるんじゃない？

高橋 だいじょうぶです。ちよつとびっくりして……。

望月 へ、泣いてんの。ほんと女みたいだよな。

高橋 ……(にらむ)。

望月 こわい、こわい。

石坂 望月、約束だ。ちゃんとやったよな。今度何かやったら、ガツンだって。

望月 ……。

石坂 お前は、いつもなぐってばかりで、殴られる側の気持ちがわからないだろ。殴られ
るっていうのは、こういうことなんだ。

石坂、望月を殴る。

望月 行ってえ。なーんて、うっそー。

石坂 ほんとうは、高橋が殴り返してなきやいけないんだ。これは、高橋のかわりだ。

石坂、もう一度殴る。

望月 今度は痛くねえや。

石坂 なに？

星野 石坂先生……

望月 じゃあ、もう一発……

高橋 やめて。

石坂の手が止まる。

高橋 もういいよ。

石坂 高橋……

高橋 僕の分なら、もういいから、やめてください。

望月 なんだよ、出てくんないよ。

高橋 もうやめてよ。

石坂 じゃあ、お前が殴り返すか？ いいか、やられたら、やりかえす。いやなことはいやと言えないでどうするんだ。女みたいにめそ泣いてたら、いつまで経っても一人前になれないんだ。ひどいことしてると思うかもしれないが、こいつにしていることと悪いことをちゃんと教えてやる、そのことが教育なんだ。先生は、お前のためを思って、やってるんだ。何でそれがわからない。

高橋 ……

石坂 じゃあ、お前がやれ。先生のかわりにお前が殴れ。文化祭の練習もほったらかして、どうせふざけてばかりなんだろう？ お前はいいかげん、こいつに腹が立ってるはずだ。

大地 望月は、ちゃんとやってるよ。それなりに。

珠代 ほんとです。

石坂 いいから、殴れ。お前がこいつを殴ることが大事なんだ。さあ、やってみろ。

間

石坂 星野先生、あなたが提案した演劇の練習のせいで、高橋をどんどんやさしくしてるようですね。

珠代 先生が、高橋くんにつらくあたるのは、ご自分の中の高橋くんに似たところが嫌いだからなんじゃないですか？

石坂 え？

珠代 あ、ちょっと思っただけなんですけど。人を殴ることができるところからって、強くなれたってことの証明にはならないんじゃないですか？ あの、そんなに威張ってばかりいなくても、大丈夫なんじゃないかしら？ 教師だからって、りっぱな人間でいようと、がんばらなくても。

間

石坂 りっぱな人間になろうとしてどこが悪いんですか？

珠代 でも、誰もがみんなりっぱな人間ってわけにはいかないじゃないですか？ いろんな人がいる。強い人間も弱い人間も。私たちが子ども達に教えなきゃいけないのは、弱さを恥じることはないってことじゃないんでしょうか？

石坂 申し訳ないが、あなたに言われても説得力がない。

珠代 すみません。

間

石坂　じゃ、いいだろう。望月は授業に行け。高橋は少し休んでろ。

石坂、出ていく。

望月　じゃあな。

望月、出ていく。

珠代　おつかれ。

大地　……。

珠代　氷枕かなんかつくろうか？　やっぱり腫れてる。

大地　いいよ。

珠代　望月くん、どうしたんだろうね？　いい方向に向かっているとってたのに。何かあったの？

大地　何も。よくわかんないよ。

珠代　ま、いいわ。教室ざわざわしてるだろうから、あとで、一緒に行こう。授業は休んで、練習の時間になったら。少し、横になる？

大地　いいよ、ここで。

間

珠代　高橋くん、女役やってて、つらくない？

大地　別に。

珠代　ほんとに？　そうだよね、休まないで毎日来てるもんね。みんな、もうオカマとか言わなくなったでしょ？

大地　うん。

珠代　ね、そうなのよ。思ったとおりだわ。

大地　女の役で、望月と夫婦の役って、なんだかすごい変なんだけど。セリフをしゃべってるって、僕も望月も、ちゃんと普通に話ししてるし。

珠代　愛し合ってる役だからね。さっき、石坂先生をとめたの、きつとうれしかったと思うよ、望月くん。

大地　そうかな？

珠代　そうだった。先生もうれしかった。

間

大地 先生。

珠代 ん？

大地 ちよつと聞きたいことがあるんだけど。

珠代 なに？

大地 内藤さんとどういいう知り合いなの？

珠代 え、ちよつとね。

大地 ちよつとつて、何がどのくらちよつとなの？

珠代 あ、何て言うか……、古い友達よ。もうずいぶん前の。

大地 友達？

珠代 うん。

大地 こないだ一緒に出かけてどこ行つたの？

珠代 駅前の喫茶カトレア。

大地 何話したの？

珠代 そんなに気になる？

大地 まあね。

珠代 私ね、昔、あの人のこと大好きだったの。竹の塚の中学校にいたとき、内藤くんは、学校の近くの飲み屋さんで働いててね。私、ときどき行つてるうちに仲良くなつて、好きになつてしまつて。

大地 へえ……

珠代 やだ、私、何話してるんだらう？

大地 気にしないでいいよ。誰にも言わないから。

珠代 ほんと？ 私、それまで、誰にも告白なんてしたことないんだけど、なんだかあの人は「うん」つて言つてくれそうなのがして。それでね、言っちゃつたの、好きですつて。

大地 へえ。そしたら？

珠代 ありがとうつて。

大地 よかつたじゃない。

珠代 でも、僕もだよとは言つてくれなくて、悪いけど、つきあえないつて。どうしてつて聞いたら……

大地 うん。

珠代 あ、あの、えーと、僕は女の人とはつきあえないつて。結婚とか考えられないつて。私のことが嫌いなのかつて聞いたら、いや、そうじゃなくて……僕は、男が好きなんだつて。

大地 ……。

珠代 誰にも言わないでね。内藤くん、そういう人だったの。だから、私たちは、それからただの友達。でも、しばらくしたら、あの人、仕事をやめて、どこかに行ってしまうって、行方しれず。それが、今、高橋くんのところにいるなんて……。

大地

珠代 あ、何て言うか、もうわかっているとと思うけど、内藤くんがそういう人だとしても、全然関係ないでしょ？ 私だってそうだった。だから、高橋くんも。あ、でも、おもしろがってみんなに言いふらしたりはしないでね。わかるよね。高橋くんなら。高橋くんだから、話したの。ほんとに、ほんとに、やさしい、いい人だから、内藤くん。

大地

わかってる。

珠代

だいじよぶ？ 高橋くん。

大地

う、うん。

9場 茶の間・台風之夜

ラジオの台風情報が聞こえてくる。

アナウンサー 北上を続けている大型の台風20号は、今夜半過ぎ、中国地方に再上陸するもようです。中国、四国、近畿、中部、東海、関東地方では、今夜から明日にかけて、強い雨と風が予想されます。台風20号の中心気圧は……

10月19日の夜、高橋家の茶の間。

外は嵐。

富美子が茶の間にいる。

工場から久雄と内藤がやってくる。

久雄

いやあ、ようやく終わった。よし、ビールだ。

富美子

ごくろうさま。大変だったでしょ？

内藤

あぶないところでしたね。水がどんどん上がってきて。

富美子

そうなのよ。ここいらへんゼロメートル地帯だからね、ちょっと大雨が降るとすぐ水びたし。

久雄

去年は夜の間に来たもんだから、気がつかないで全部濡らしちゃってさあ。

富美子

台風は、いつもの雨と違って塩気があるから、濡れるとさびがひどいのよ。

久雄

今年はどうだいじようぶ。ちゃんと上に上げたから。

内藤

はい。

久雄 内藤くんの部屋、あぶないなあ。大事なものあるんだったら、こっちに持ってきて置いたほうがいいよ。

内藤 別に大したものないですから。それにまだこんな（手で足首くらいまでを示して）ですし。

久雄 これから、どこまで来るかわからないから。去年なんて、朝起きたら、このへん（膝上くらいの高さを示す）まで水で、もうひどいめにあった。

内藤 わかりました。気をつけます。

久雄 うん。

夏子が風呂上がり。

夏子 内藤さん、お風呂入ったら？

内藤 うん、ありがとう。

久雄 まだ、いいよ。いっぱいやってからで。

富美子 お父さん、力仕事したんだから、汗流してもらえばいいでしょ？

久雄 ま、いいだろ。ビールだ。

富美子 はい。あ、そうだ、夏子、あとでちょっと手伝って。おにぎりつくるから。

夏子 おにぎり？ もう晩ご飯食べたじゃない。

富美子 いつ停電するかわからないからね。一応、おにぎりつくって用心するのよ。

夏子 おにぎりじゃなくって、ちゃんとおかずもつくって冷蔵庫に入れておけばいいじゃない。

富美子 停電したらだめでしょ。台風にはおにぎり。そういうもんなのよ。

大地が降りてくる。

富美子 あ、大地、お風呂はいる？

大地 ううん、まだ。

富美子 じゃあ、最後に入る人は、お風呂のお湯捨てないでね。

玄関から声

岡崎 こんばんは。桜井電器店です。

夏子 あ、岡ちゃん。今日は何だろ？ テレビ？

富美子 お父さん？

久雄 違うよ。

岡崎、入ってくる。

久雄 どうも。

岡崎 あの、ラジオが壊れたって。

富美子 ラジオ？ 工場の？

久雄 そうだよ。

内藤 すみません。

久雄 いや、いいんだよ。あんなどこに置いといたのが悪いんだから。ちょっと見てくれるかな？ 持ってくるから。

富美子 やめて下さいよ、あんな油だらけのもの持ってくるの。

久雄 じゃあ、どうすんだ？

富美子 岡崎さん、悪いんだけど、工場行ってもらえる？ 水が上がってるんで足元あれなんだけど。

岡崎 外もすごいですよ。消防署の前は水浸しで、舗道と車道の区別がつかなくなってます。その踏切のところも大きな水たまりになって、横のどぶがあふれてました。

富美子 それは大変。夏子、いそぐわよ。

夏子 はい。

と、二人、台所に消える。

久雄 なんで、今日はテレビだめなのかな？

岡崎 あの、大雨ですし。

久雄 台風が来てる、天気予報が見られない。よし、じゃあ、テレビを買おう！って話になるかと思っただけど。あーあ、こいつが治ればなあ……だめかね？

岡崎 やってやれないことはないですけど、ブラウン管ですから、ほんとに新しく買うのと変わらないですよ。

久雄 ああ、じゃあいいよ。それじゃ、ちょっと工場来て。ラジオ見てよ。

岡崎 はい。

久雄と岡崎、工場へ向かう。

内藤 なんだかあわただしいね。

大地 台風だから。

玄関から声。

美土里　こんばんは。

美土里、入ってくる。

大地　なんだよ？

美土里　なんだよじゃねえよ。

大地　お前、ほんとがら悪くなったな？　最近。

美土里　役作り、役作り。

大地　そんな小坊主、いないだろ？

美土里　いるんだよ。

奥から、富美子と夏子出てくる。

富美子　あら、おそかったね。

美土里　戸締まりしてたんで。

大地　どうしたの？

富美子　アサ子さん、大阪に仕事で出かけたんだけど、この台風で新幹線止まっちゃったんだって。今日は帰れないかもしれないから、美土里ちゃんはうちで預かることにしたの。

美土里　お世話になります。（大地に）よろしくな。

大地　なんだよ？

富美子　晩ご飯食べた？　今、おにぎり作ってるんだけど。

美土里　いただきます！

奥から、久雄と岡崎がやってくる。

この時点で、高橋家、内藤、プラス岡崎、美土里で茶の間はすごいことに。

美土里　（久雄に）お世話になります。

久雄　おお、いらっしやい。

富美子　ラジオどう？

岡崎　一度水没しちゃってるんで、ちょっとむずかしいかもしれません。

内藤　すみません。

久雄　いいって、いいって。じゃあ、困ったな。

富美子　そうだ、大地のところにラジカセあるでしょ？　あれ、持ってきてよ？

久雄　そうだ、そうだ。ちよつと持ってきてこい。

大地　いやだよ。

久雄　なんでだ？

大地　聞きたい番組あるから。

久雄　そんなの聞いている場合じゃないだろ、台風が来るんだぞ。台風情報聞かないでどうする？

大地　ええ？

久雄　こんなとき思うだろ？　ああ、テレビを買ってもらっておけばよかったって。

大地　思わない。じゃ、持ってくる。

大地、上に行く。

夏子　ねえ、なんだか台風って楽しいね。

富美子　何言ってるの？　あっちこっちですごい被害出てるのよ。

久雄　そうだ、ものすごい大型だっていうからなあ。

夏子　蠟燭は？　懐中電灯は？　ちゃんと用意した？

富美子　だいじょぶよ。

夏子　明日学校休みになるかな？　台風来ちゃったら、行けないもんね。連絡網でまわってくるのかな？　電話はだいじょぶなの？　大水になっても？

富美子　そうね。どうなんだろう？

岡崎　だいじょぶでしょ？　電気使っていないで。

夏子　外どんなだろう？　ちよっと見て来ちゃだめ？

富美子　何言ってるの？　ダメよ、外出ちや。何がとんでくるかわからないんだから。

久雄　そうだ、今晚は一晚、どこにも出かけない。内藤くんも、走りにいくのは休みにして、ゆっくり休んでよ。

内藤　はい。

久雄　いつもいつも悪いね。大地に気使ってもらって。

内藤　好きでやってるんで。

久雄　いや、すまないと思ってるんだよ。

大地が上からラジオを持って降りてくる。

大地　はい。

久雄　お、よしよし。じゃ、天気予報だ。

久雄、ラジオのスイッチを入れる。

スネークマンショーがちょうど始まったところ。

久雄　なんだこれ？　ゲイのみなさんって……

大地　ああ、何でもない。

夏子　ゲイって何？

久雄　え？（富美子に）なんだ？

富美子　さあ……

久雄　お前、いつもこれ聞いてるのか？

大地　え？　今日のパーソナリティはこの人だけど、他の曜日は違うから。

久雄　ゲイっていうのはあれだろ、ほら？

富美子　お父さん。

夏子　オカマ？　おすぎとピーコ？

久雄　誰だそれ？

富美子　映画の話する双子よね。

久雄　あ、丸山明宏みたいなものか？

富美子　美輪明宏でしょ？

夏子　誰、それ？

美土里　人生相談してる人。

富美子　そうそう。

久雄　へえ、こんな番組があるんだ。

岡崎　スネークマンショーっていうんですよ、これ。イエローマジックオーケストラが音楽をやって、若い人に人気のある番組なんですよ。この人はタックさんっていうて、水曜日の担当なんです。

一同、ちょっと驚く。

久雄　くわしいね。さすが電器屋だ。

岡崎　いや、そういうわけじゃ。ただ、ちよくちよく聞いているんですよ。

夏子　電器屋さんなのに？　テレビじゃなくて？

岡崎　ラジオっていいじゃないですか？　ちゃんと声が聞こえるから。テレビは、なんだかいいかげんですよ。誰に向かってしゃべってるのかよくわからない。

富美子　たしかにそうかも。

久雄　でも、「ゲイのみなさん、こんばんは」なんて、言って、そんな連中、そこいらにほいほいいるわけないだろうに、なあ。何なんだ？　これは？

大地　わからないじゃない？　そんな？

久雄　お？

大地　もう、いいから、天気予報聞けば？

久雄 そうだった。

久雄、チューニングする。
天気予報が聞こえる。

ラジオ 長野県で大きな被害を出しています。現在、暴風波浪警報が東京、神奈川、千葉、茨城の各県に、暴風大雨警報が長野、山梨、埼玉、千葉北部に出ています。大型の台風20号は、現在、岐阜県の高山市付近を北東に向かって時速30キロメートルで進んでいます。続いて、概況です。

久雄 つけっぱなしは電池のムダだ。

と消す。

夏子 いいじゃない、つけとけば。

久雄 いや、消す。

富美子 お父さんの好きにさせてあげなさい。

大地 聞かないんだったら、もう部屋に持ってつてもいい？

久雄 それはだめだ。今夜ラジオはここにおいておけ。

大地 勉強するとき聞いているんだよ。

久雄 「ながら族」か？ だったら、ここで勉強しろ。

大地 やだよ、そんな。

富美子 今日はいいわよ、勉強しなくて、台風なんだから。

夏子 私も。

美土里 やった！

短い間

富美子 台風だから。

久雄 おお、そうだ。一応、畳上げておくか？

富美子 そうね、その方がいいかも？

内藤 畳ですか？

久雄 うん。このへんじゃね、床上浸水して、畳が濡れると大変なことになるんで、タイピングを見て、上に上げちゃうんだよ。

富美子 でも、まだいいんじゃない？

久雄 いや、去年もそうやって油断したんだ。備えあれば憂いなしだ。内藤くん、手伝わってもらっていいかな？

富美子 お父さん、悪いわよ。

内藤 いえ、いいですよ。

久雄 じゃ、下は全部、上げとくか？

夏子 じゃあ、お父さんとお母さんどこで寝るの？

富美子 そうね、私は夏子の部屋。美土里ちゃんも。

美土里 はーい。

夏子 内藤さんは？

富美子 大地のところでいいんじゃない？ 物置、どうなるかわからないから。

夏子 ええ、いいなあ、お兄ちゃんだけずるい！

大地 うるさいな。

富美子 いいかしら、内藤さん？

内藤 大ちゃんは？

大地 僕はいいよ。

富美子 じゃ、決まりね。

久雄 え、おれは？

富美子 やだ、忘れてた、お父さんは……

夏子 お兄ちゃんどこ？

間

久雄 いや、おれは……まだ早いから、下にいる。内藤くん、ま、いっぱいやろう。でもって、あとで、畳上げるの手伝って。大地もな。

大地 はーい。

久雄 よし、じゃあ、解散。あ、岡崎くん、雨の中、悪かったね。

岡崎 あの、新しいラジオ持ってきましようか？

久雄 いや、いい。次はテレビだから。社長によろしく。

岡崎 はい。

岡崎、玄関で立ち止まって、高橋家の人々を見ている。

富美子 何、どうかした？

岡崎 いえ。おじやまりました。

岡崎、去っていく。

大地が立ち上がって、話し始める。

高橋家の面々と美土里は退場。

場面は、変わって、大地の部屋。

同じ夜の遅い時間。

大地

夜がふけるに連れて、雨と風はどんどん激しくなった。遅くまでにぎやかに茶の間でしゃべっていた僕たちだけど、もうそろそろ寝ようということになって、下の部屋の畳をみんなでわいわいと積み上げた。そして、母さんと夏子と美土里は夏子の部屋に、内藤さんと僕は僕の部屋に布団をしいて、寝ることになった。父さんは、下で寝ると言いはったんだけど、大人げないと言われて、上上がり、それでも、僕の部屋ではなく、夏子の部屋に入っていた。別にいいのに。僕は風呂から上がって部屋に行った。

内藤が横になっている。

大地

内藤さんが寝てる。二つならんだ布団の一つに。声を掛けようかと思ったんだけど、寝息が聞こえた。僕は、となりの布団にそっと入った。風呂上がりはいつもドキドキする。でも、今日は特別だ。だって、となりにいるのは、内藤さんなんだから、珠代が言ったことが本当なら、ゲイの人なんだから。もし起きてくれたら、僕はその話をしたかった。タックさんのラジオから聞いたいろを、どう思うって？ 僕もたぶんそうなんだって、すっかり話してしまいたかった。今は二人きりなんだから。目がさえてちっとも眠れない。ちっとも眠くなんかならない。無理矢理目を閉じると、外の嵐の音と、内藤さんの寝息が、一緒になって聞こえた。すごい嵐だ。僕は決心した。布団の中でカラダを少しずらずらして、内藤さんの布団の中に入ることにした。内藤さんは、僕に背中を向けて寝てる。冷たい布団をそっと持ち上げて、カラダをすべりこませて、僕は息をひそめた。内藤さんは、気がつかない。寝息のリズムもかわらない。寝返りを打って、こつちを向いたら、どうしよう？ いや、いっそ、こつちを向いてほしい。内藤さんの心臓の音が聞こえた、僕のも一緒に。外の嵐もあいかかわらず。こんなふうには誰かと一緒に寝るのは、いつ以来だろう？ 僕の指が内藤さんの手に触れた。わざとじゃない。手を動かしたら、そこに指があつたんだ。ひんやりとつめたい。どうしよう？ 知らないふりして、にぎってしまったおうか？ 聡が映画館でそうしたように？ でも、もし、内藤さんが目を覚ましたら、どう思われるだろう。どうしよう？ 僕は、またそっと、布団を出て、自分の布団にもどった。

内藤、寝返りをうつ。

大地

まだ夜は明けない。この狭い部屋で僕は、内藤さんと同じ空気を吸ってるんだ、内藤さんの吐いた息を僕も吸ってるんだと思ったら、ドキドキしてきて、でも、深呼吸

吸もしてみたりして。でも、僕は、部屋を出た。

大地、溜息をつく。

大地
下に降りて、台所で水を飲んだ。曇が上げられて床下がむき出しになっている茶の間。縁の下には、少しずつどこからか水が入ってきてる。さっきよりも水かさは増していて、なんだか、この家全体が水に浮かんでいるみだいだ。雨は小降りになって、窓から、雲がすごい勢いで流れてくのが見える。

窓の向こうに望月が来る。

望月
高橋……高橋？

大地
何だよ、望月。こんなに遅く？

望月
川見に行かねえか？

大地
川？

望月
そうだよ、荒川の土手。台風ですごいぞ、きっと。行ってみようぜ。

大地
……

風の音はげしくなる。

10場 土手

望月と大地がやってくる。

二人、川を眺めている。

雨と風が激しい。

望月
すっげえな。川原水浸しじゃん。

大地
あそこはピッチャーマウンド？

望月
おお、そうそう。

大地
こんな川初めてみた。

望月
このへんはまだだけど、上流が大雨なんだろう？

大地
すごいや。

望月
なんで、止めたんだよ？

大地
え？

望月
あのととき？

大地 石坂、いつも気に入らないし。別に、かわりに殴ってほしいとか思わなかったから。
望月 別に感謝してたりしないからな。
大地 もうしないよ。あのときだけ。
望月 当然だ。

美土里がやってくる。

美土里 やい、望月、大地を放せ！

大地 美土里、何してんだよ？

美土里 こんな夜中に、大地呼び出して、また因縁付けて悪いことしようっていう魂胆だろ？ どうだ？ 凶星だろう？

望月 違えよ。

大地 そうだよ。ただ、川見に來ただけだよ。

美土里 それが畏だ。どこだ、北村は？

望月 いねえよ。

美土里 じゃあ、何してた。

大地 だから、川見てた。

美土里 ほんとか？ (大地に) ほんとか？

望月 こいつ、ほんとうっとおしい。

大地 ほんとだつて。心配ない。

美土里 なんだ、そうなのかよ。気配感じて、下に降りたら、玄関から出てくところで。望月の姿が見えたから、やばいと思つてさ。

大地 やばくないから。

望月 ああ。

美土里 なんだ、そうなのかよ。

望月 おまえこそ、あぶなつかしいな。一応、女なんだから、こんな夜に外歩いてんじゃねえよ。

美土里 なんだと？ 自分のこと棚に上げて、なんだと？ 男ならいいのか？

大地 男と女とか関係なく、美土里、飛ばされるぞ。

美土里 いいじゃんか。台風で空飛ぶのが夢なんだ、いいチャンスだ。

望月 じゃあ、どっか飛んでけよ。

美土里 飛んでも飛んでも戻ってきてやる。

望月 もう帰って寝ろよ。

美土里 だったら、大地、一緒に帰ろうぜ。

望月 高橋は俺と一緒に川見てるんだよ。
美土里 畜生、のけ者にするな。
大地 いいよ、もう帰ろう。わかったから。
望月 いいじゃんか、まだいようぜ。
美土里 いいから、帰るんだよ。
望月 よせよ。
美土里 なんだと。
大地 やめてよ、二人とも。

お柳とお玉が登場。

お柳 おやおや、お兄さんたち、ケンカかい？ いいねえ、にぎやかで。
お玉 そうですねえ、お柳さん。
お柳 どれ、ちよいと助太刀しようかねえ。
お玉 お待ち下さい、お姉さん。いいえ、子供のケンカに大人が入るのは不粋のきわみ。
お柳 粋でないせな江戸っ子のお姉さんらしくもない。
お柳 おや、そうだった、それじゃ、ここから高見の見物としようか？

子ども達、あっけにとられて、二人を見ている。

お柳 どうしたんだい、お前さんたち、私たちはかまわず、にぎやかにやっどくれ
お玉 それぞれ！
望月 あのときのばあさんだ。
美土里 うん。ねえ、こんなところで何してんのおばさん？
お柳 おばさんじゃあない。
美土里 じゃあ何だよ？
お玉 私たちはお化け。
美土里 お化けさん？
お柳 さんはいらない。
大地 見えるんだ？
美土里 見えるって、だって、いるじゃん。
望月 うん。
大地 ねえ、お柳さん？
お柳 なんだい？
大地 お柳さんたちは、恋してないと見えないんだよね。

お柳 ああ、そうさ。私たちはね、お前たちの恋する思い、恋の熱で生きてるんだから。
大地 恋の熱？

お玉 台風が運んできた、あつたかい空気もちよつとお借りしてます。

大地 二人とも、そうなんだ？ ねえ、そうなんだ？

望月 ばーか、ちげえよ。

美土里 そうだよ、いい加減なこと言うな！

お柳 まあ、なんつても言うがいいさ。お前達は、誰が好きなんだい？ 私たちに教えておくれ。

望月 聞いてどうする？

お柳 励ましてやるからさ。

お玉 応援してやるからさ。

美土里 応援つて、どんな？ お化けとして何か特別な？

お玉 そんなことでも思いのままに。

お柳 それは言い過ぎ。

お玉 すみません。

お柳 私はお前達の鏡だよ、鏡に映る自分の姿が、人に言えない秘めた思いの相談相手は水鏡。鏡に映る自分の姿がせめて自分を元気づけてくれたらどんなにいいだろう？ 私たちは、そのために出てきてるんだ。ねえ、お玉。

お玉 はい、お柳さん。

二人、ずぶずぶと水の中に入っていく。赤い月が見えてくる。

美土里 何なんだ、いったい？

望月 いつもいるのか、あいつら？

大地 さあ、呼んだら出てくるつて言ってたけど。

お柳 私たちは、いつでもいるよ。

お玉 ただし、恋する者にしか見えないけどね。

お柳 さあさ、悩みをうち明けてごらん、勇気づけてあげようじゃないか。

お玉 さあ、お兄さんたち、さあさ。

二人、踊るようにつらつらしている。

大地 ねえ、誰が好きなの？ いいじゃん、言ってみなよ。

望月 ばーか。そんなの言えるかよ。

美土里 そうだよ、言えるわけないだろ。

望月 (お柳に) いいかげんなこというな？

お柳 そのばあさんが見えてるってことが何よりの証拠だって言ってるだろ？

望月 ……………

お柳 さあ、おいで、お前たちの恋を手助けしてあげよう。

お玉 いらっしやい。

お柳 おいで、大声がいやなら、ここまできて、そっと耳打ちしておくれ。

お玉 いらっしやい。

お柳 さあ、おいで、おいで。

手招きする二人。

美土里、歩き出す。

大地 美土里！

望月 あぶないぞ、おい！

お柳 さあ、おいで、おいで。

お玉 おいで、おいで。

歩いていく美土里。

お柳 さあ、もう少し。

お玉 もう少し。

大地 待て！

大地、美土里に近づき、抱き留める。

美土里 大地！

お柳 おや、おや、残念。今夜の酒のさかながふいになった。

お玉 もう少しだったのに。

大地 お前達は何者なんだ？

お柳 私たちは、このあたりに住む物の怪だよ。

大地 物の怪？

お柳 そうだよ。途方にくれる恋心かかえて、川辺にやってくる男や女、その思いが、凝り固まって、私たちの姿になった。

お玉 私たちの声になった。

お柳とお玉、水の中で自由自在に動いては語る。

お柳 恋に狂った娘が寺の坊主に恋いこがれ、こがれたあげくに大蛇となって、逃げる男をおいかけた。坊主は、隠れた寺の鐘。火を吹く大蛇は、鐘を抱きしめ、大鐘もろとも焼き滅ぼした。

お玉 恋の熱、恋の炎

お柳 娘十六、八百屋の娘、江戸の大火で逃げ込んだ寺。そこで出会った、やさしい男。も一度会うには、火事さえあれば。会いたさ、見たさに怖さを忘れ、娘は町屋に火を放つ。

お玉 恋の熱、恋の炎

お柳 私たちは、そんな恋の思いで生きてるんだ。大昔からねえ。ああ、おいしいことをした。

お玉 まさか命はとるまいものを。

お柳 もうちつと、思い切りがあつたらねえ。

お玉 ええ、思い切りが。

お柳 それじゃ、行こうよ。お前さんたち、せいぜいしつかりやとくれ。私たちは、いつでもいるよ。会いたくなったら、またおいで、

お玉 それじゃ。

お柳 はははは………

お柳とお玉、去っていく。

急に雨が激しく降り出した。

大地 いなくなった。

望月 なんだ、あいつら。

大地 (美土里に) だいじよぶか？

美土里 うん。

大地 かえつたら、すぐ寝ろよ。

美土里 だいじよぶだつて。

大地 もう、帰ろう。台風が来る。

望月 じゃあな。

大地 うん。明日、学校で。台風だけど。

望月 ああ。

三人、歩き出すが、川面をもう一度見つめてみる。

前の場のしばらく後。
外の嵐が激しい。
大地と美土里が帰ってくる。

大地 うわあ、すっこい濡れた。台風、いよいよ本番かな？

美土里 大地。

大地 なんだよ？

美土里 今日のこと、一生、忘れないような気がする。

大地 え？ 何言ってるんだよ。

美土里 台風が来るたびに思い出すよ、きつと。

大地 そんなことないって。まだ、14じゃん。これからどんどん年とってつたら、おぼえることがどんどん増えて、子供の頃のことなんて、いつまでも覚えてるわけないって。

美土里 珠代が言ってたじゃん。大人っていうとなんだかすごい遠い存在だと思うだろうけど、人は大人になってもそんなに変わるもんじゃないって。子供はそのまま大人になるんだって。

大地 やだよ、そんなの。全然違う大人になりたいよ。やだよ、いつまでも、今のまんまじゃ。

美土里 そりゃそうだ。よし、じゃあ、寝るか？

美土里、階段をあがりかける。

美土里 寝ないのかよ？

大地 僕は、もう少し、ここにいる。

美土里 待ってるんじゃないの、内藤さん？

大地 ばーか。ぐーぐー寝てるよ。水飲んでから寝る。

美土里 そうか……、じゃあ、おやすみ。明日、晴れるといいな。

大地 うん。

美土里、二階へ。

大地、ラジオに手を伸ばす。

カセットのスイッチを入れる。

流れ出す、タックさんの声。

ポリユームをしぼって、一人で聞いている。

人の気配がするので、カセットを止める。

電気も消す。

暗い中。
と、内藤がやって来る。大きなカバン。やってきたときの服装、ただし、ズボンの裾をたくし上げている。手には靴。
玄関に降りて出ていこうとする。

大地
内藤さん？

内藤、驚いて立ち止まる。
大地、電気を点ける。

内藤
大ちゃん。どこ行ってたんだ？

大地
荒川。内藤さんこそ、何、そのかつこう？ 出かけるの？

内藤
いや、ちよつと。

大地
ちよつと、何？

内藤
ずぶぬれじゃないか。風呂入って、早く着替えないと。

大地
平気だよ。僕なら。どうしたの？

間

内藤
こっそり出ていこうと思ったんだけどしょうがない。いろいろ世話になったね。みんなよろしく。

大地
出てくの？ なんで？ こんな夜中に？

内藤
苦手なんだ、別れのあいさつ。引き留められるのも。それじゃ。

内藤、また玄関へ。

大地
僕がさつきあんなことしたから？

内藤、立ち止まる。

内藤
そうじゃない。

大地
やっぱり起きてたんだね。

内藤
あ。うん。でも、それは関係ない。

大地
でも、気持ち悪かったでしょ？

内藤
そんなことないって。

大地
じゃあ、何で出ていくの？

内藤
……………。

大地 僕、聞いちゃったんだ。あの、内藤さんは、そういう人だって。あ、だからって、布団に入っていることにはならないけど。

内藤 そういう人？

大地 星野先生に聞いたんだ。でも、誰にも言ってない。ほんとうに。さつき、タツクさんのラジオ聞きながら。みんなゲイなんているわけないって言ってたけど、ひどいよね。

内藤 ちよつと、待った。それって、僕がそうだったこと？

大地 僕にはわかるよ、内藤さんの気持ち。僕も女子にバレンタインデーのチョコレートもらうたびに、なんか違うなと思ってたんだ。いつも、そのままもらってはいたけど。わかるよ、とつても。だって、ぼくもそうなんだから。たぶん。一緒なんだ。わかっている。同じゲイだからって、そんな好きとかそういうふうになるのっておかしいよね。僕はただ、内藤さんのことが好きで、あ、それは別につきあつてほしいとかそういうんじゃないや全然なくて、別に内藤さんがゲイだって知ったから好きだってわけでもなく、その前からずっと、だから、一緒に走るのすつごいうれしくて。背中見て走るのすつごいわくわくして。何言ってるんだらう？ だから、ただ、なんていうか………

内藤 (静かに) 何、ねぼけたこと言うてんねん。

間

大地 内藤さん……

内藤 珠代に、自分はそういう人間やって言うたのは、あんまりしつこくて、それでも言わんと納得せえへんかったからや。

大地 どうしたの、急に、関西弁。

内藤 だから、そんなふうに思われても、迷惑なんや。好きとか言われても。何言うてんねん。

大地 ごめん、そうだったんだ。でも、いい。僕は、内藤さんのことが好きだ。何て言われても。

内藤 今言ったやろ、僕はそないな人間やないって。

大地 でも、好きなんだもん。

内藤 もう、ええかげんにしてくれや！

内藤、カバンから封筒を出して床に投げる。

大地 何？(封筒を手にとって) お金？

内藤 盗んだんや。給料まだもらってないからと思ったんやけど。ずいぶん余計に入ってるやろ。

大地 ……。

内藤 新しい機械入れて、工場拡張しようっていう話きいて、これはきつと小金ため込んでいるにちがいないと思たんや。小さな工場は、毎日銀行に金持ってくようなことはせえへん。手形のやりとりするほどの金額でもないけど、手提げ金庫には現金が入ってる。そこがねらいめや。

大地 初めからそのつもりで。

内藤 ああ、そうや。せやから、びっくりしたわ。珠代にばったり会って、お前の面倒見ってくれ言われたときは。あの女、俺の嘘、まだ信じてるんやからな。金づるにならんで見切りつけたから、さよならしたんやってこと、まだ気がついてへんねん。

大地 ……。

内藤 今夜、逃げることにしたのは、台風のどさくさにまぎれよう思ったからや。いつもは下で寝てる二人が今日はいない。お前もどっかに出ていった。チャンスや。そう思ったんやけどな。

間

大地 じゃあ、じゃあ、どうして、一緒に走ってくれたの？

内藤 ここにいるのがしんどかったからに決まってるやろ。この茶の間で卓袱台かこんで。なんやかんやべちやくちやしやべって。一人になろう思っても、すぐ呼びに来るんやから。ほっといてほしいわ。

大地 言ってくれたら、ほっといたと思うよ。

内藤 ……。

大地 どこか他に部屋借りたいって言ったら、そうすることもできたと思うよ。

内藤 あほか。そんなことしたら、チャンス逃してしまうやないか。じゃあな。

内藤、玄関に降りる。

大地 僕も行く。

内藤 え？

大地 僕も連れてってほしい。

内藤 何ねぼけたこと言うてんねん。迷惑やて何度言うたらわかるんや。

大地 だって、好きなんだもん。いやだよ、こんな夜に、出ていくの。僕も行く。

内藤 うるさいやっちゃな。

大地 そんなに僕のが嫌い？

内藤 ああ、大嫌いや。このどうしようもない自分のすぐ次くらいにな。

大地 ……。

内藤 俺はお前が思ってるような人間違うねん。もうほっといてほしい。このまま出て行かせてくれや。好きだの、なんだの、うるさいちゅうねん。もうやめにしよ。せえぜえ、りっぱな大人になるんやな。俺のことなんか、すっぱり忘れて。

大地 忘れないよ。忘れるわけない。

問

やがて、内藤は歩き出す。

大地 お金。

内藤 いらん。

大地 でも……………

内藤 じゃあな。

大地 待って。

内藤、立ち止まり、振り返る。

大地、手を差し出す。

大地 握手して下さい。もし、気持ち悪くなかったら。

内藤、大地に近づき、握手する。

大地 さよなら。

内藤 さよなら。

内藤、出ていく。

外の嵐が激しい。

大地、しばらくそのまま立っているが、やがて、ラジオの前にすわる。
スイッチを入れずに、じっと正面を見ている。

エピソード

ラジオからの声

ラジオ 日本列島を縦断し、記録的な被害を出した台風20号は、温帯低気圧に変わりました。この台風による主な被害は、死者110名、行方不明者5名、負傷者543名、家屋全壊139棟、半壊1287棟、床上浸水8157棟、床下浸水47943

棟……

舞台が明るくなると11月はじめの夕方。

場面は荒川の土手。

星野栄一と珠代がいる。

遠くにいる大地に話しかけている心持ち。

栄一 いやあ、お前さん、よくがんばったなあ。どうだい、知り合いの一座に話してやる

から女形をやってみないか？

珠代 お父さん、何言ってるの？

栄一 すっかり落ちぶれちゃいるが、芝居を見る目はたしかなつもりだ。悪いようにはしないからさ。

珠代 高橋くん、本気にしちゃだめだからね。高校行って、いつか、今度の芝居のこと思

いだしたら、そのとき言って。いつまでこんな偉そうなこと言ってられるかどうか
わからないけど。

大地が登場。

大地 おじさんは、昔からずっとこのあたりに住んでるの？

栄一 ああ、生まれも育ちも向島だよ。それがどうした？

大地 この川にお化けが出るって話を聞いたことはある？

栄一 この川？ 荒川にかい？

大地 うん。

栄一 さあ、聞いたことはないが。お化けなんて、そんな気の利いたもんはいやしな
いだろう。

大地 どうして？

栄一 荒川は、昭和の初めに掘った放水路だよ。そんな今出来の川にお化けなんてい
るわけないだろ。

大地 じゃあ、鐘ヶ淵の伝説は？

栄一 鐘ヶ淵は隅田川にあるんだ。荒川じゃあない。

大地 え？ そうなの？

珠代 ちよつとだけ設定をかえたのよ。

栄一 この川には伝説なんてそんな気の利いたものはありやしないんだ。歴史だった
って、ほんの何十年。ただのつかい掘り割りってとこさ。

大地 でも、僕見たんです。私たちは芸者だよっていう女の人たちを。

栄一 芸者？

大地 話しながら、川の中に消えていった。

珠代 そんな特技あるの？ 今の向島の芸者衆には？

栄一 ないな。

珠代 じゃあ。

栄一 そいつらは幽霊なのかもしれないな。

大地 幽霊？

栄一 おう。戦争で焼け出された向島の芸者衆の魂がさまよってるんじゃないか？

大地 戦争って。

栄一 そうだよ。このあたりは、直接の爆撃はそれほどじゃなかったが、荒川を渡ったこっちの向島、深川あたりはそりゃひどいもんだった。大勢の人間が逃げてきて、この川で死んでいったんだ。川は血で真っ赤に染まっていた。まあ、お前さんが生まれる前の話だけどね。

大地 幽霊？

栄一 人恋しいそんなやつらが、ふっと出てきて悪さしたんだろ？ 何かされやしなかったかい？

大地 恋をしろって。がんばれって！ 恋をしてる人間にだけ私は見えるんだって。

栄一 ほお、こんな子供に色恋の至難をするなんざ、芸者衆、それもかなりお転婆な連中なんだろう。

珠代 今でも見るの？

大地 わからない。(呼んでみる) お柳さん！ お柳さん！

珠代 いるの？

大地 いない。

珠代 高橋くんの恋が終わったってことなのかな？

大地 どうなんだろう？

栄一 また、いつか、会う日もあるさ。よし、じゃ、行くか。

珠代 ええ。

栄一 一座の話、おぼえとっておくれよ。

大地 はい。

栄一、退場。

珠代 望月くんとやりたかったね。あんなにがんばったのに。

大地 うん。

珠代 長谷川くんもよくやってたけど、私はやっぱり望月くんが見たかった。でも、しょうがないか。お母さん、急に亡くなっちゃうんだもんねえ。

大地 あいつ、もう学校来ないのかな？

珠代 来るよ、だいじょうぶ。

大地 葬式に行ったら。下向いたまま正座してて、あいつじゃないみたいだった。
珠代 高橋くんも、元気づけてあげてよね。友達なんだから。
大地 友達か……
珠代 違う？

間

珠代 内藤くん、その後、消息は？
大地 何も………
珠代 私が余計なこと言ったからかな？
大地 違うと思うよ。
珠代 ならいいんだけど。高橋くん、なんだか、顔つき変わったね。
大地 先生も。
珠代 二度目の失恋の気分かな？
大地 失恋か……

石坂がやってくる。

珠代 あら、石坂先生、どうしたんです。
石坂 望月のところに行ってみようと思いましたがね。
珠代 来るときには、来るんですから、そっとしておいてあげても。
石坂 だいじょうぶですよ。がつんとはいきませんから。とりあえず、ほうっておくのは、よくない。お前が来るの待ってるんだってことを言っておかないとね。
珠代 はい。
石坂 星野先生も行きませんか？
珠代 はい。
石坂 高橋は？
大地 僕は……、元気になって、学校来るの待ってるって、伝えてください。待ってるって。
石坂 そうか？ そうだな。じゃあ。

石坂と珠代、退場。

場面は変わって、高橋家。
夕飯の終わった団らんの時間。
富美子が物干場でギターを弾いている。

となりには大地と聡。

茶の間には、久雄と夏子、それに岡崎。

久雄 おい、そんなところにいないで、おりてこい。テレビが来たんだぞ。

大地おりていく。

聡と富美子はそのまんま。

久雄 じゃ、スイッチを入れるぞ。

スイッチを入れる久雄。

番組は「ザ・ベストテン」

久雄 松坂慶子は色っぽいな。網タイツがなんともいえない。

夏子 西條秀樹は、もう終わっちゃった？

聡 まだみたいだね。

夏子 やっぱいいね、テレビは。

久雄 おお、前より色っぽいぞ。

夏子 最新型ですから。

一同、卓袱台を囲んでテレビを見ている。

夏子 お母さん、テレビ来たよ。

富美子 わかってる。

夏子 なんだか、夢中だよ。 (久雄に) 何かあったの？

久雄 あるわけないだろ。

夏子 どうしたんだろ？ 内藤さんいなくなってから急にだよ。

間

夏子 どうしてるのかな？ どこかでテレビ見てるかな？

久雄 さあね。

夏子 黙っていなくなることはないのにね？

久雄 ああ。

夏子 新倉さんも何も言ってないの？

久雄 ああ。

夏子 いいの、さがさないで。

久雄 自分でいなくなっただ。探してみてもしょうがない。

夏子 ねえ、また、誰か住み込みの人、お願いしない？

久雄 もういいよ。仕事、そんなに忙しくなくなったからな。

大地 新しい機械入れたりしないの？

久雄 ま、しばらくはな。大地、お前、あと継ぐか？

大地 え？

久雄 もう、いいぞ、考えなくて。俺一代で終わりかもしれないからな。

大地 何でそういうこと言うかな？ そういう言い方したら、反発して、跡継いでやるって言うと思ってるんでしょ？

久雄 お、ばれたか。

大地 あのね……

久雄 もう、こんな小さな工場、いつまでやってけるかわからない。内藤くん、いなくなってくれてよかったよ。ほんと、いつか、首切らなきゃいけないより、自分で出てっけてくれた。

大地 また、無理しちゃって。

久雄 お前ももう子供じゃないんだから、大人の無理をもう少し暖かい目で見ることをおぼえろ。岡崎くんもそう思うだろう？

岡崎 そうですね。もう子供じゃないんなら。じゃ、何か具合の悪いところあったら、連絡ください。すぐ来ますんで。

久雄 ああ、ありがとね。

岡崎 おじやました。

岡崎、玄関へ。

大地を手招きする。

大地、降りていく。

久雄と夏子は、テレビを見ている。

玄関先でのやりとり。

岡崎 ラジオ聞いている？ スネークマンショー？

大地 うん。先週紹介してた「ウイズ」って映画、聡と一緒に見に行った。

岡崎 どうだった？

大地 ダイアナ・ロスがいかにしてたけど、案山子をやったマイケル・ジャクソンって人がすっごいカッコよかった。

岡崎 マイケル・ジャクソンか。昨日のは聞いた？

大地 アル・パチーノの「クルージング」？ なんだか、今いちみたいだね。

岡崎 見てみたらいいよ、いろいろ勉強になるかもよ。

大地 勉強って？

岡崎 ま、いろいろとね。大ちゃんは知ってる？ 西條秀樹の「ヤングマン」の元歌が、
ヴィレッジ・ピープルの「Y M C A」だって。

大地 うん。

岡崎 じゃあ、ヴィレッジ・ピープルがゲイのグループだってことは？

大地 え、そうなの？

岡崎 そうそう、Y M C Aでは、ゲイの仲間と出会うことができるって歌ってる歌なんだ
。

大地 西條秀樹は知ってるのかな、そのこと？

岡崎 さあ、どうだろうね？

大地 岡ちゃんは何で知ってるの？

岡崎 じゃ、またね。

岡崎、出ていった。

見送っている大地。

アサ子と美土里がやってくる。

アサ子 ごめんください。夜遅くすみません。

久雄 お、どうもどうも。片づいた？

アサ子 ようやく。奥さんいる？

夏子 お母さん、秋本さん。

富美子、ギターを置いて降りてくる。

富美子 あら、美土里ちゃんも。

アサ子 ごめんなさいね、遅くなって。

富美子 もう発つの？

アサ子 ほんとは土日がいんだけど、美土里の学校もあるし。でも、土日は引越し屋、
高いのよ。足元見てるのよね。いろいろお世話になりました。これ、つまらないも
のですけど。

と菓子折を差し出す。

富美子 いいわよ、そんな。

アサ子 持って来ちゃったんだから、もらっというて。

富美子 ありがとう。

アサ子 あら、テレビ来たの？

久雄 ようやくね。

アサ子 ほんとにいいの、うちのテレビ？

富美子 いいわよ。テレビなんて一つあれば、たくさん。一人に一台なんて言ってるけど、そんなの贅沢すぎよ。

アサ子 まあ、そうね。じゃあ、電車があるんで。お世話になりました。

富美子 いつでもまた来てね。私たち、ずっとここにいると思うから。

アサ子 来たときは寄らせてもらうわ、きつと。じゃあ。(美土里に) あんたも、挨拶しなさい。

美土里 お世話になりました。

夏子 元気でね。

美土里 じゃあね、大地。

大地 元気でな。

美土里 大地も。

大地 なんだよ、お前らしくないじゃん。

美土里 うるさいな。これからはこれが私だよ。

大地 ようやく女らしくなることにしたのか？

美土里 まあね。ううん、違う。どうでもいいだろ。じゃあな。

大地 うん。

アサ子と美土里、出ていく。

夏子 みんないなくなっちゃうね。内藤さんも、美土里ちゃんたちも。

間

富美子 いつかまた会えるわよ。

夏子 そうなの？

富美子 そうそう。

富美子、また上に戻っていく。

久雄 まだやめないのか？

富美子 いい月が出るの。お父さんも来てみたら？

久雄 おれはいい。

富美子 夏子は？

夏子 ええ、「ザ・ベストテン」見る。そうだ、お父さん、今度はビデオ買ってよ。
久雄 ビデオか？ もう少し安くなってるからな。

富美子、物干場に上がる。ギターを弾く。
大地、ゆっくりと上にながっていく。

すべての登場人物が舞台上に登場してくる。思い思いの姿勢で、富美子のギターを聞いている。

大地 その曲なんていうの？

富美子 「ムーンリバー」

聡 映画の主題歌だよな。

富美子 オードリー・ヘップバーンの「ティファニーで朝食を」。昔見たわ、ジョージ・ペ
パードとヘップバーンが抱き合うの、ラストシーン。雨の中、猫をはさんで。

大地 何、それ？ 全然わからない。

聡 オードリー・ヘップバーンは、ティファニーで朝食を食べるようなオシャレな世界に
あこがれてる。でも、なかなかうまくいかない。で、南米の大金持ちと結婚しそ
うになるんだけど、最後に、パツとしないジョージ・ペパードを選ぶんだ。

大地 へえ。おもしろいの？

聡 うーん、どうだろう？

富美子 私は大好き。ギター弾くのよ、ヘップバーンが。窓に腰掛けて。それがこの曲。字
幕に出てた歌詞はね、この川を超えて、その角をまがって、空にかかる虹の向うで
二人はまた会おうっていうのなんだけど。日本語の歌詞はちよつと違ふのよ。

間

大地 ねえ、どうして、お父さんと結婚したの？

富美子 お見合いだもの。いい人だなと思って。

大地 一緒に、虹を超えていけると思った？

富美子 そうね。あときは。

大地 今はどうなの？ しあわせ？

富美子 しあわせよ。決まってるじゃない。

大地 じゃあ、なんで哀しい歌を歌うの？

富美子 しあわせだから決まってるでしょ。

大地、富美子のギターを聞いている。
月の光。

幕

【上演記録】

劇団フライングステージ第30回公演

「ムーンリバー」

2006年8月9日(水) ～ 13日(日)

中野 ザ・ポケット

作・演出・関根信一

出演

高橋大地

…… 早瀬知之

高橋富美子／飯岡真由美

…… 西田夏奈子

高橋久雄／北村泰司

…… 野口聖員

高橋夏子

…… 木村佐都美(おちないりん)

秋本美土里

…… 加藤記生(宇宙堂)

大貫晴美／秋本アサ子／お玉

…… 石関準
…… ますだいつこう

岡崎四郎／西澤澄江

…… 阪口拓也

内藤和人

…… 関根信一

星野珠代

…… 羽田真

石坂雄三

…… 小林高朗

長谷川聡

…… 東じゅんぺい

望月伸也

…… 大門伍朗

星野栄一／お柳

……

美術・小池れい

照明・福田さやか

音響・樋口亜弓

衣裳・石関準

舞台監督・笹原千寿

宣伝美術・佐久間記代子

宣伝写真・サトウカオル

稽古場・にしすがも創造舎

助成・芸術文化振興基金

制作・劇団制作社

プロデューサー・樺澤良

製作・劇団フライングステージ